

耐忍の限界點に來たかにより決定される。若し世界經濟の回復が不可能であるならば、利潤は停止點に來たものとして、これ以上の社會改良は勿論不可能であり、既存のものをも削減するだらう。そして世界經濟會議及び軍縮會議の成功しない限りは、世界經濟の回復は希望稀薄と云はざるをえまい。轉じて労働者階級をみると、英國ではまだ生活條件が最少限界に到來してはゐないので、これ以上は後退出來ないと云ふ窮地に迫られてはゐないと思ふ。その限りに於て労働黨が社會主義を標榜する時に、黨勢は膨脹するよりも寧ろ減少することにならないか。だが之は労働組合の全國的組織たる「労働組合會議」の幹部の決意如何に係るので、若し組合が——彼の容易に急進的なりえざりし組合が——社會主義を支持する決意が強固ならば、黨員を現状で維持することは出来る。而して三十一年の總選舉でえた投票は、六百六十四萬八千廿三票で、一九二九年の八百三十六萬二千五百九十四票に比すれば減少であるが、一九二四年百五十一の議席をえた時の五百四十八萬七千六百二十に比すれば、明かに投票數に於て増加してゐるのである。それにも拘はらず議席が五十二に下落したのは、政府黨が連合したのと比例代表制を採らない爲である。従つて黨員が現状を維持すれば、次の總選舉に於て百五十乃至二百

の議席をうるだらう。更に労働者階級の僅かに六割しか占めない労働黨を擴張しうるならば、單に労働者階級のみ投票でも裕に絶對多數を獲得することにならう、だがそれは次の次又はその次の選舉であつて、それ迄約十年間は在野黨として、破綻した黨内部の弱點を矯正し、有力なる首領を發見し鍛鍊する爲に費されねばなるまい。従つて豫測しえない偶發事件の發生しない限りに於て、資本主義か社會主義かの決定が争はれるのは、一九四〇年後であつてその以前にはありえない。然し若し第二の世界大戰が行はれ英國がその渦中に巻き込まれるとすれば、敗北の場合は勿論勝利の場合と雖、その時期は早められるに違ひない。

英國に社會主義が實現される條件が充分に具備されてゐることは、ブロックウエーの云ふが如くである。労働者階級が人口の過半數を占めてゐることに於て、有能なる技術者が労働黨を支持してゐることに於て、生産力が充分に成長して生産機關が整備されてゐることに於て、凡そ資本主義より社會主義社會への推移が、圓滑に行はれうるあらゆる條件は完成してゐる。唯生産手段の所有者がその私有を抛棄しないことにより、此の推移が阻止されてゐるだけである。此の點に於て社會主義社會への推移の爲に、殆ど條件を具備せざりし露西亞とは到底比較にな



らない。唯英國に於ける社會主義實現を困難ならしめる一條がある。それは此の國の殆ど一切の生活資料と工業の原料が國外から輸入されてゐることである。従つて若し英國のみが社會主義國となり、國外諸國は依然として資本主義國であり、露西亞に對するが如くに經濟上の壓迫を加へたならば、英國は殆ど致命的の打撃を受けるだらう。獨逸潛航艇による脅威でさへあれ丈の苦痛を嘗めたのである。此點に於ては農産物の輸出國たる露西亞が封鎖を受けるとは、其窮境に於て比較にならない。之が英國の社會主義實現の途上に横はる最大の難關であらう。

英國社會主義の特異性は本文第二章に述べた如くであるが、之等の特徴は將來に於て消失するであらうか。私は英國社會主義は二點に於て缺點があると思ふ。一は資本主義を説明する社會科學であり、他はその哲學の理想主義たるは差支ないが、理想主義を體系的に把握してゐない點である。前者の缺點に對してはマルクス、レーニンの研究により不備が補足されるだらう。後者に就てはマルキシズムの唯物辯證法の哲學は、到底英國國民の國民性に合しない爲に、受容されることはないと思ふ。動もすれば決定論に陥り易いマルキシズムは、倫理的行動國民たる英國國民に到底適應しない。寧ろケムブリッジ大學を中心とする實在論の哲學が全き體系を整へ

て社會問題をまで包括するに至るならば、それからの影響を受けるに違ひない。然し實在論者はグリーン等の理想主義を眞に補完するものが實在論だと云つてゐるから、實在論の影響を受けても、理想主義を捨てることにはならないし、何れにしても、マルキシズムの哲學に參ずるとは考へられない。

既にマルキシズムに全部的に満足しえないならば、英國勞働界が共產黨に走ることは有りえない譯であるが、その他の點に於ても共產黨に對する反感は尠くない。英國人は帝政時代以來今日に於ても亦、露西亞を以て歐洲の僻陬に在る未開國と考へ、社會發達の段階の下位に在るものが上位の國の運動を指令するが如きは考へうべからざる事だと思ふので、第三インターナショナルの一環として、モスコイのコミンテルンの指令を仰ぐが如きは到底甘受しえまい。のみならず共產黨の革命方法はプロクウエーの云ふが如く英國では必要もなく又實行の可能性も尠い。又共產黨の階級道德の觀念は英國人の道德觀念と相容れず、調和し難き間隙を作るのである。更に何れの國の共產黨にも見受けられる所の、マルクス、レーニンの片言隻語を鸚鵡の如くに暗誦したり、自己のみが社會改革の選ばれたる使徒たるかの如くに自負する狹隘なる



セクト主義、統制の名の下に指導者の命令に盲目的に服従すること等は、英國労働者の如く露西亞と異なるデモクラシーの教養を受けたものには、遂に忍耐することは出来ない(註二)。その他露西亞のコミンテルンが西歐の事情を理解しえないことから起る思想上の間隙は英國に於ては特に大きい(本書第三章「コミンテルンの崩壊」参照)。かくして共産黨は決して英國労働界の主勢力となるをえず、永久に過激なる反抗黨として終るだらう。

最後に所謂反議會主義的傾向はどうなるだらうか。前章で社會主義黨と資本家階級との三種の關係を述べたが、第一第二の場合は如何ともすべからざる所で、かゝる宣傳あるも労働黨は勢力を擴張しうるし、又資本主義より社會主義社會への過渡に於て、多少の損失のあるのは避け難いから、之等は重大な點ではない。唯問題となるは第三の場合で、労働黨が政局に立つて社會主義法を實行する時に、資本家階級が武力を以て抗争する場合である。之は可能のことであり、之に對して政府は同じく武力を以てするか總同盟罷業を以てするの外ないであらうが、最少抵抗線に沿つて問題を處理する政治的妙諦を解する英國の資本家政黨は、事態をこゝまで進展せしめない内に、社會主義の實現が結局不可避と洞察するならば、何等かの妥協點を見出

して平和的に解決するだらう。何れにしても近い未來の問題ではないから、稍空論を弄ぶの感はあるが、私はその妥協は公有さるべき生産手段の賠償を求めることにあるのではないかと思ふ。かくして争ひはその賠償の額に歸着する。從來の英國社會主義者は、沒收説と賠償説とに二分されてゐるが、必ずしも賠償を否認する譯ではないから、此の邊で妥協が成立するとみるべきだらう。賠償説に就ては更に多くの云ふべき事はあるが、今は暫く省略する。

たとへ妥協が不可能だとして、資本家階級が武力を以て抗争する場合に、労働黨が武力或は總同盟罷業を以て對抗するとしても、之は果して反議會主義又は革命主義と目すべきであらうか。曾てトロツキーは「英國は何處へ往く」(註三)と云ふ名著の中で、英國社會主義のマルキンズムと異なる特徴を挙げ、一は宗教的なること他は議會主義的なることとし、此の特徴は容易に消失しまい、若し英國に革命の起る可能性があるならば、それは唯一つの場合でしかない。即ち労働黨が下院の絶對多數となつて社會主義法案を通過せしめ、上院が一回拒否した後、更に總選舉により絶對多數をえて同一法案を遂に上下兩院を通過させた時、資本家階級は武力を以て反對し生産手段を政府に引渡すまい、その時労働者階級も亦武力を以て對抗する、之が英國



で起りうる唯一の場合であると結んだ。多数のマルクス主義者が輕卒に英國の革命來を喋々する時に、英國を研究すること精細にして周密、容易に革命の來らざるを斷言したことに於て、流石にトロツキーの洞察眼に服するのであるが、敢てトロツキー氏に問ひたきことは、革命とは何かと云ふことである。革命と云ふ言の從來の用語例によれば、革命とは被支配者の地位に在るものが非合法の手段により、社會組織を顛覆した場合を云ふのである。今トロツキーの云ふ場合に於て、労働黨は議會の絶對多数黨として政局に在るが故に支配者であつて被支配者ではない。労働黨政府が武力を以て資本家階級の武力に抗争するは、合法的に成立した法律の實施の爲に合法的の武力を行使するのであつて、之は決して革命の概念に該當しない。若し之を革命と云ふならば、凡そあらゆる國の政府は、常住不斷に革命を行ひつゝあると云はねばならない。故にトロツキーの云ふ唯一の場合も亦革命ではない、かくして英國には凡そ革命は起りえないのである。

昭和八年七月號「改造」

(註一) "The Labour Monthly", January, 1933, pp. 31-35.

(註二) Leon Trotsky: Where is Britain going, 1936.

## 附 録



## (一) 獨逸學界の印象

### (一)

一九二五年の三月末、私は巴里へ急ぐべく獨逸を立つた。滞在は七ヶ月にわたつたのであつたが、何となく獨逸に残した仕事があるやうに思はれて、後髪ひかるゝ心持であつた。昨年五月中旬ナポリから上陸して、七年振りに再び私は獨逸の土地を踏んだのであつた。

この七年の間に街を過ぎ往く旅人には、獨逸はそんなに變つた姿を示してはゐない。「貸家」フエルミヤンといふはり札が往來で著るしく眼に着くことゝ、總選舉の時に白地に赤で卍を染めだしたナチスの旗が家々の窓から翻ることゝ、ナチスの制服を着けた青年が五六人でも列を作つて、軍隊式に歩調をそろへて練つて歩くこと位のものである。新聞を読むと失業者の数が何百萬人あつて、いつになつてもその数が減らないとか、どこ／＼で共産黨員とナチスの黨員とが衝突して、數人の死傷があつたとか報道される。然し遠い日本で想像されるほど、獨逸は外形的には混亂



もしてゐないし、七年の間に變り果てたとも見えない。

然し表面を潜つて内部に入つてゆくと、かなりの變化を氣づかずにはゐられないのである。伯林の新宿といはれるクルフルステンダムへ往くと、角並みのカフェーが夜毎に一杯で、雜踏いはん方なき有様だが、私は同行の獨逸人に獨逸經濟の危機とこの雜踏とは何の因果關係があるのかと尋ねたら、一寸考へてゐたが人間が悲境に在ると却てかうした場所が榮えるのではないか、餘裕のある金持よりも貧しい人が却て無駄使ひをするのと同じことだといつてゐた。

戦前の獨逸を知つて最近又來た人は誰でも、あの傲慢な獨逸人が實に日本人にも愛想がよくなつたといふ。戦争直後の獨逸は戦場では勝つたのだといふ自負心があつた、インフラチヨンの時代には弱つたが齒を食ひしはつて我慢を耐へたといふ所があつた。所が戦後十數年を経た今日では、ほと／＼疲れ切つたといふ弱さが見える、そして獨逸國民といふ矜持の念が衰へたことは確である。老いた人も若い人も獨逸といはずヨロツバ全體がもう「失はれた國」だ、これからの國は亞米利加と露西亞と日本だといふ。

一番私の氣づいた變化は、道義的の頹廢であつた。レストランで態と勘定を間違へることや、タキンの運轉手が遠回りをして餘計な金を食ふことは、昔から有つたことだらうし、どの國にもあるに違ひないが、他人の物を盗むこと、偽造銀貨をつかませることは、最近において殊に著しくなつたやうである。私も數回金を家の女中に盗まれた苦い經驗を持つた、その女中がよい女中で信用してゐただけに、今にその記憶が消え失せない。一人の女中が物を盗むことに、私はさまで大きな意味を置くのではないが、盗まれた話を有識階級の人達に話すると、世界戦争の後に獨逸はさうなつた、そして盗まれるのは當方が鍵をかけてゐないから悪いのだと云ひ、あたかも當然の事のやうに事件を扱つてゐる。私はこゝに獨逸人一般の道義的水準が落ちたことが窺はれると思ふ。

今結婚期にある獨逸の青年では、男の數は女よりも少し生活難は結婚を遅らせるからでもあらうが、青年男女の風紀はかなり亂れてゐるやうに見受けられる。私の接した數個の例に徴して見て、又獨逸人自身から聞いてみても結婚前に童貞であるとか處女であるとかは、ほとんど必要の條件としては考へられてゐないらしい。戦争はどの國にもかうした風潮を作つたけれ



ども、他の國が比較的早く常態に復したに拘はらず、獨逸は益々ひどくなつて往くやうである。

かゝる國情の中に學界だけが、屹然として、威容を維持してゆけるとは考へられない。少く共私の専門とする經濟學や社會思想の領域においては、十九世紀末から今世紀の始めにかけてが、獨逸學問の最盛期で今は獨逸が世界學界の最高峰を占める時代は去つたのだと思ふ。九月から約五ヶ月間私は毎朝四五時間伯林大學の國家學研究室に入つて讀書に耽つたものだが、ウイヘルム、アレキサンダーの兩フムボルトの像を左右に眺めて大學の門を潜り、左にモンゼン右にトライチケの銅像を見ながら、研究室のワグナー・ザールカシュモラー・ザールに入り、ワグナーやシュモラーの石膏像を前にして、よく私は考へたものである。矢張りワグナー、シュモラー、ブレンターノを出し、少し後れてはマックス・ウエーバーを持つた時代は、獨逸が世界の學界において華かなりし時であつて、今ブレンターノ既に亡く、シュルツェ・ゲバーニッツ、カール・デール、オッペンハイマー老い、僅にゾムバルトが七十を越して尙盛んではあるが、もう峠を越したと云はねばならない。そしてこれに續く後陣が餘りに振はない。アモン

は瑞西のベルンに籠り、シュムペーターはボンを去つて永久に亞米利加に移り、學界はうたた蕭條の感がある。現に私は七年の間に出た文献を集めようとして、餘りにも買ふべきものゝ少いのに驚いた位である。

社會思想界を見渡しても、社會民主主義派の中に、カウツキーを除いてはこれといふ思想家を見出しえないし、共產主義者は問題にならないし、唯兩者の間にはゆるローザ・ルクセンブルグ・シューレーと稱される一群があつてカール・コルシュ、フリッツ・シュテルンベルヒ、アルツール・ローゼンベルグ等の人々が、光つた存在として注目されるだけである。

カウツキーは八十に近いに拘はらず、ウイーンに在つて筆硯愈々健在である。「唯物史觀」戦争とデモクラテイー」の大著を書き、今また千頁に上る著書をまとめてゐる。昨年暮に逝いたベルンシュタインと彼だけが、マルクス、エンゲルスを生前に知つたマルキシズムの巨頭である。そのベルンシュタイン亡き後に彼獨り生き残つて悠々として倦む所なきは、誠に心強いことではなければならない。

私は前回の獨逸滞在には、かなり多くの人に會つて、その印象を「在歐通信」の中に記した



が、今度は僅の人にしか會はなかつた。その少い人の中から幾人かを選んで、印象的のスケッチを次に試みてみようと思ふ。

## (二)

此の前外國で世話になつた人には必ずクリスマスの際に手紙をだすことにしてゐた。向ふからも自分の著書や論文を贈つてくれる人があつて、今度外國へ立つ私は親しい人々のゐる國へ往くといふ心易さがあつた。其等の人の中で今は物故した人が二人ある、一人は英國の社會學の教授ホップハウスであり他の一人は獨逸の社會學哲學の教授マックス・シェーラーであつた。前者は私が會つた時に病床に臥してゐたから、そんなに訃報を聞いて意外に思はなかつた。然しあの意氣潑刺たるシェーラーが今は亡き人となつたかと思ふと、獨逸學界のために惜しむばかりでなく、私個人としても寂しく感ぜざるをえない。

日本を立つ時に門司からシベリア經由で、シユルツェー・ゲバーニッツに宛て、手紙を出して置いた。嘗てフライブルグで會つてその後も何かと交渉があつたので、あの人には是非とも

又會ひたいと思つてゐたのが、遂に機會がなくて獨逸を立つて了つた。

伯林へ着いてから自分の研究の都合から、二人の相談の學者に手紙をだした。一つは伯林大學の教授ハインリッヒ・ヘルクナー (Heinrich Heikner) で、今一つはウイーンのマックス・アドラーであつた。アドラーへの手紙は着かなかつたものと見えて、何の返事も受取らなかつた、その辭日本へ戻つて來てみると、同氏から論文を寄贈して呉れてゐたのであつた。ヘルクナーは早速面會の機會を作つて呉れたので、伯林到着後一週間程にして同氏と面談することが出來た。

彼は伯林大學の社會政策の教授であり、獨逸「社會政策學會」の代表者である。社會政策學派が千八百七十年代の初期に、マンチェスター學派に反對して起つた時は、獨逸學界における劃時期であつた。大戰後獨逸經濟の疲弊は社會政策の實施を困難にし、他方で社會主義の普及は社會改良主義の影を薄からしめた。故に人は「社會政策の危機」といふ。例年の「社會政策學會」は大學の國家學關係教授の全國大會たる威容がなくなつた、だが其でも「社會政策學會」の存在は依然として學界に無視することは出來ない。



その學會の巨頭ヘルクナーと對座して、書齋の中を見渡すと、うづ高く積まれた書籍新聞雜誌資料の上に、二枚の油繪がかゝつてゐる。一つは聞かなかつたからハッキリは分らないが、見覚えあるマックス・ウエーバーではなかつたかと思はれた。今一つは聞いてみたら大戰で戦死した令息の肖像であるさうだ。氏の夫人は再婚したのでその令息は、前の御主人との間に出来たいはゞ連れ子である。然し氏は大變その青年を愛してその人倒れた後の氏は、めつきり健康が衰へたといふことであつた。

氏の著「労働者問題」二巻は、鋭さや獨創はないが、全體をよくまとめた本である。圓滿な調和性が人及び作物を特徴づけてゐるやうに感ぜられるが、それでも千八百八十七年に氏がシュトラスブルグのブレンターノの下で「上部シレジアの綿工業とその労働者」といふ題目で學位論文を出した時には、その思想が急進的だといふので、ブレンターノをさへ社會非難的にさせたさうである。まづ瑞西のチューリッヒの教授となり、次でシュモラーの後繼者として伯林大學へ招かれたのであつた。

私が七年間の學界の狀勢を聞いた時に、氏は暫らく黙つて考へてゐたが、やがて起つてあち

らこちらから兩手に一杯、書物を積んで来て、これは知つてゐるかこれはかういふ意味で重要であるといふ説明をして呉れた、この一條の話は私を裨益する所少くなかつた。次でヒットラー運動について意見を尋ねたら、あれに學者として批評を加へるには、まだ時が餘りに早すぎると云つて多くを云はずに、唯ホイッスの「ヒットラーの道」(Heuss: Hitlers Weg)を良書として推薦された。

私の伯林生活の送り方について話が出た時に、氏は大學研究室へ紹介狀を書いて呉れ、獨逸の政治に關する個人教師の紹介を頼んだら何れ相談してから、手紙をだませうといつて呉れた。その手紙を待つてゐる内に、偶然、人からヘルクナー教授が死にましたねといふことを聞かされた。遂迂濶であつたため新聞記事を見逃したので、氏は五月二十八日に病床にある數日にして逝かれたのであつた。レーデラー教授の話が出た時に、私があればゾムバルトかあなたかの後繼者ですかと尋ねたら、私もゾムバルトもこの通り健在なのですから誰の後繼者といふ譯ではないのですといはれたに拘らず、はしなくも氏は健在ではなくなつたのである。思ふに私などが氏の最後に會つた一人ではないかと思ふ。



やがてある人からヘルクナーの文庫が賣物に出てゐるから、日本で買はないかと注意された。私はそれで再び氏の邸を尋ねて文庫を丹念に檢べたことがあつた、その際夫人の愁傷は見るに忍びない程であつた。氏を想ふと人間の無常を感じざるをえないのである。

(三)

ヘルクナー氏の紹介状を持つて伯林大學の國家學研究室主任ゴットル教授を尋ねたが不在なので、助手のドクター・ウインテルといふ人に會ひ、入室票をもらひ書庫を回つて見せてもらった。大學の校門で巡視が學生票を檢べるし、研究室でも入室票がなければ入れない。私はお蔭で無料木戸御免の鑑札を手にいらしたのである。

伯林大學の教授ではゴットルにもシュエマツハーにもゾムバルトにもレーデラーにも會はなかつた。唯伯林高等商業學校の教授ゲッツ・ブリーフス(Geetz Briefs)に會つたことがある。曾て氏がフライブルグの教授をしてゐた時に、私はレーデラーの東京の後任者を探すために各大學の教授を物色して歩いたことがあつた。シュムペーター、ミーゼス、アモン、ブリーフス

等がその候補者であつた。その用件を帯びて氏とフライブルグで話したことがあるのである。氏は伯林へ移つてから學界の地位は更に上つたやうだ、氏は政黨關係は「中央黨」に屬してゐて、その黨の後援があるのが氏の強味だといふ。ヘルクナーの後任を全國的に探すなら、氏とハムブルグの教授エドアルト・ハイマンが競争者となるに違ひない。

氏から御茶に招かれて夫人にも會へた。夫妻は私がフライブルグのホテルへ招待したことがあり華やかなダンスを眺めながら色々の物語りをしたのであつた。夫人はそれをよく覚えてゐて、あの時にあなたは日本へ歸つたらマルクス批判の著述をするのだといひましたが、あの時のあなたの様子はいつまでも忘れませんといはれたのは少からず忸怩たるものがあつた。

座に最近に結婚するらしい若い男女がゐて、ともすれば話題が散漫になり易い。御茶には難かしい學問上の話などは止めにして、肩の凝らない潤いだ空氣にすべきものなのであらう、然し私から云へば忙しい時間を割きもし割いてももらつた以上は、何か後々に残る收穫をえたいのである。所がマルクスに關する近頃の著書として、カール・ムースの「反マルクス」を擧げて外には注目すべきものはないといつたこと、「勞働組合辭典」(Handwoerterbuch der Gewerk-



schaften, 2 Bde) を看過してならない文献だといはれた外は、何の學びえたことがなかつた。違つた客と一緒にした御茶や御飯に、誰をも満足させることは難しいとは思ひながら、トツブリ暮れた伯林の郊外を、胸中すくなくらず不平を抱きながら、歸路についたのであつた。

伯林大學の教授マイネッケ(Friedrich Meinecke)は獨逸の政治學界の權威である。氏はウィルヘルム二世の專制主義と獨逸國民の國家絶對主義とに對して、常に自由主義を唱へて反對して來た人である。その著 *Welbuergerium und Nationalstaat; Die Idee des Staatsracons* の二冊は前回の外遊當時に接して少からず感激を與へられたのであつた。世界を擧げて獨裁主義と國民主義とが跳躍しかけて來た時に、氏は果していかなる感慨を持たれるであらうか、もし獨逸においてその感慨を伺つてみたいと思はしめる人があるなれば、まづマイネッケ教授を求めねばならない。

氏は昨年七十の誕辰を祝はれたかなりの老齡である。私はふとしたことから氏にお目にかかる因縁が出來て、伯林郊外の邸宅に氏を訪うた。一般に年よりは壯健に見える獨逸の學者に比べて、氏は言葉にも所作にも思つたよりも老衰を見せてをられた。私がヒットラー運動に對す

る感想を尋ねた時に、豫期した通りに心外千萬であるといふ意を漏らされ、獨逸革命を経て折角自分等の辿り來れる路を、又再び逆行させるものとして嘆聲を漏らされた。私の特にお尋ねしたいことは、社會主義の實現のために革命主義をとる共產主義と議會主義をとる社會民主主義との比較論評で、もし社會民主主義をとるならば、議會主義を擁護する根據をどこに求められるかといふことであつた。氏はもちろん社會主義者ではない、それでもこの設問は可能な譯である。所が氏は自分は社會主義には絶對に反對だといはれて、その攻撃でかなりの時間を費された。私の質問は社會主義のためであらうが何であらうが、氏から聴きたいのは議會主義の合理的論據にあつたのだが、話をそこに戻すのに中々骨が折れた。そしてその質問への答へとしてはさまでの收穫はなかつた。然しミルの「自由論」の獨譯を持つて來られて、實に良い本です。ねといはれて一くさりミルに關する話が出たり、書齋の隣の大きな長方形の書庫へ入つて、澤山の書物を見回してゐる氏を眺めながら、研究と思索の長い道程を辿つて來られた碩學といふ感じがして、それだけで何ともいへない床しい心持を抱いて歸途につくことが出來た。

同じ伯林大學の歴史の教授グスターフ・マイヤー(Gustav Mayer)は社會民主黨に屬し、H



ンゲルス、ラッサールの研究者としてその名は廣く日本にも知られてゐる。氏にはたび／＼お目にかゝる機会を持つた。その眉目鬚の工合など、いかにも獨逸大學教授と思はれる風貌である。恐しく愛想のよい人でいつもコレゲ（同僚）と呼びかけ、いつも家族から便りがあつたかと聞かれる。その夫人もカウツキーやベルンシュタインとも親交があり、非常にマルキシズムについての造詣を持つて居られるさうであるが、謙遜な方で容易にそんな風を見せられない。氏はあのエンゲルス傳の第一卷に次で、今第二卷を著述中で非常に多忙であつた。あの第一卷とエンゲルスの青年時代の著作を出版したことが、エンゲルスのためにマルキシズムにおけるエンゲルスの地位を高めることに、餘程の貢献をしたことは人の知る通りである。エンゲルスの地位は或は上り或は下る盛衰があつた。だが氏の著作はエンゲルスがマルクスと獨立して既にマルキシズムを構成してゐたことを知らせて、最近におけるエンゲルスの地位の上騰に有力の寄與をなしたのである。エンゲルスの筆蹟はよみ憎いので中々骨が折れると云つてゐられた。

又こんな話をされた、ラッサールがビスマルクに送つた書簡は永く分らなかつたのが、革命

後社會民主黨内閣の時に、偶然にも首相官邸の固く閉ぢられた棚が壊れて、一束のビスマルク宛の書簡が飛びだし、その中にラッサールのが見出された。首相から自分に話があつて出版してみないかといふことで編纂してみたが（多分 *Bismarck und Lassalle* のことであらう）、あれによつて從來不明だつたラッサール、ビスマルク間の交渉が白日に出た、偶然の棚の崩壊が助けになつてくれたといふのであつた。

獨逸社會民主黨の話が出た時に、我々社會民主黨員はもうマルキシストではありません、イデアリストですと云はれたのは少し驚かされた。共產黨が總選舉で投票が増したことにについては、もつと増すと思つてゐた、獨逸の民衆はまだ教育が足りないので共產黨に投票するのですといはれ、自分は英國の「獨立労働協會」がすきで、英國に旅行した時にしみ／＼あの團體が氣にいつた。エンゲルスも「獨立労働協會」がすきで彼が同黨の黨員にならなかつたのは、唯彼が獨逸人で英國人でなかつたからであつた。その國民の持つ特異のニュアンスさへなかつたら、「獨立労働協會」こそエンゲルスの加入した會であつたらうと云ふことであつた。

現代獨逸のマルキシズムの思想家として、氏はカール・コルシュを力を強めて推稱された。



コルシュは共產主義者で氏とは立場を異にするのであるが、マルキシズムの全面にわたつてあれだけ造詣を持った學者は今の獨逸には外にゐないといはれた。私はそのコルシュには氏の紹介によつて幾度か話しをする機會を持つたのであつた。

(四)

カール・コルシュ (Karl Korsch) は元來は英法の研究者で夫人と共に英國で勉強してゐたこともあつた。法律を研究してゐる内に、段々社會問題に興味を感じて、遂にマルクス主義者となり會ては共產黨に屬してゐた。哲學經濟學政治學の全面に亘つて教養が深く、從來のマルクス主義者が動もすれば一部門の研究者に止まつてゐるのに反して、コルシュはマルキシズムの全部門に視野が及んでゐることに特徴がある。

今までの著書 *Kernpunkte der materialistischen Geschichtsauffassung, 1922; Marxismus und Philosophie, 1923; Materialistische Geschichtsauffassung, Eine Auseinandersetzung mit Karl Kautsky, 1927* 等は日本にも知られてゐる本で、其中には邦譯もある。之等の著書はいづ

れも小冊子で大著ではないが、ドイツのマルクス學界には廣く讀まれてゐる。去年の暮から今年の始めにかけてカール・マルクス・シューレーといふ學校で、マルキシズムについて長い連續講演をやつて、一部の人の注意をひいたが、これはこの五月頃に出版されると云つてゐたから、この本が出たらマルキシズムの全面にわたりコルシュの實力を示すことになるだらう。

「資本論」の廉價版がこの數年の間に、三方面から出た、その一つはベネデクト・カウツキーの手になり、その第二はコルシュによりその三はアドラツキーにより編輯されてゐる。何れも多少内容に差異があり、夫々の編輯者がかなり長文の序文を書いてゐる點に特徴がある。カウツキーのは社會民主黨系、アドラツキーのは共產黨系、コルシュのは何れとも異なる立場を代表し、三種三様の立場から稱賛と批判とが讀書界を賑はしたものである。

彼は共產黨代議士でもあつたし、チューリッゲンで共產黨が一時政權を握つた時に、イエナ大學の教授ともなり、これは確ではないが同地方の内閣にも列したことがあつたやうに記憶する。然しその後コミンテルンの命令と議論が合はないで共產黨から除名された。イエナの講義は自分で中止して今は伯林に住んでゐるが、教授の地位は今でも残つてゐるらしい。イエナ



を去つた時に蔵書の大部分は、フランクフルトのグリューンベルヒの研究所に賣却したとかで、今は書齋に残る書物はそんなに多くはない。年の頃四十七八眉目清秀の好男子で、主張はしつかりしてゐるが偏狭な所がなく、教養豊かな紳士である。氏を知る人は常に「ゼーア・ネット」といふが、獨逸語のネットといふ言葉が氏にはよくあてはまる。恐ろしく博學の人で博引旁證至らざるなしといふ有様で、外國人に話をする時でも早口で話題が八方に飛ぶので、大抵の人は二時間も話をするにグツタリと疲れるといふ。かなり多くの日本人を知つてゐるが、日本人は決して自分の立場をハッキリと明言しないものだが、あれは當局の壓迫から來てゐるのか、それとも國民性から來てゐるのかと云つてゐた。

氏はマルクス、エンゲルスに對しては充分高く評價するが、レーニンに對してはさほどではない。これに反してトロツキーとローザ・ルクセンブルグに對しては、かなり高に評價をしてゐる。實際トロツキーは露西亞を追はれてトルコにゐながら、西歐各國に持つ勢力は相當大きなもので、現に伯林にもトロツキー派の雑誌が三つもある。氏は目下大變自然科学に興味を持つてゐて、努めて其の種の講演會などには出席してゐる。マルキシズムを發展させる一つの路は

自然科学の研究にあるとは氏の意見である。

氏の夫人は今も共産黨員でカール・マルクス・シューレーの教師をしてゐて、英語と哲學と經濟學とを受持つてゐる。色の黒い大兵の婦人で、始め私は氏の祕書がカールといつてゐるので、これが夫人かと思ひ込んでゐた所が、その後夫人に出會つた時に、コルシュから「これが僕の本當の妻ですよ」と云はれて、ひどく面喰らつたことがあつた。

伯林大學の哲學社會學の教授フィアカントには前回に二度も會つたことがあり、今度も手紙を出した所が早速返事が來て、ある土曜の夕方から來るやうにといふことであつた。所が迂潤にも日曜と思ひ込んで約束の日を失禮してしまつた。も一度氏は手紙を寄越されて又次の土曜を指定して呉れたが、相憎フリッツ・シュテルンベルヒとの會談が交渉中で、その返事を待つてゐる時なので、到頭氏に會へなかつたのは残念であつた。

だがその遺憾はブレスラウ大學の教授ジグフリード・マルク (Siegfried Marck) を訪問することによつて償ふことが出來た。氏の書いた Hegelianismus und Marxismus (岩波の哲學叢に邦譯がある) は、會て讀んで非常に有益であつた。最近には Dialektik in der modernen



Philosophie, 2 Bde. を出して哲學界の注意をひいてゐた。氏を訪ねてみようと思つたのは、もう獨逸を去らうとするに間もない時であつた。丁度伯林の知人が氏と懇意なので、是非往つて御覽なさい、きつと失望することはありませんよ、今ブレスラウでの花形ですからといふので、手紙を出したが中々返事が來ない。その知人はなんとといふ失禮だらうといつて長距離電話をかけたものらしい、間もなく夫人の代筆で大變多忙だつたものだから失禮した、都合のよい日を云つて呉れば停車場に出迎へるからと云ふ返事が來て、氏一人に面會する爲に、態々伯林から九時間のブレスラウまで行くことにした。車中よほどの收穫がなければ償はないと思ひつゝ、盛んに雪の降る中をブレスラウへと急いだのであつた。

氏は四十七八、今が働き盛りである。正教授ではなく員外教授ではあるがブレスラウ大學哲學の中心人物であり、社會民主黨に屬して社會問題についても一、二冊の著書がある。丁度同大學のある新任教授がユダヤ人であり、何かの時にトロツキーの言葉を引用したとかで、ヒトラー黨の學生が排斥運動を起して騒いでゐる時であつた。

まづ話がそれから始まつて、次でマルクスにおける辯證法がヘーゲルの辯證法であるのか、

又さうとしても辯證法が正當に使はれてゐるのかといふことに移り、氏は辯證法に二種類を區別して、マルクスが「資本論」等に使用したのは、ヘーゲルの辯證法ではない、辯證法の他の種類のいはゆる相關辯證法であると云はれた。マルクスがカントを正當に理解したのかどうかについて、氏はマルクスのカントについての理解はたらないがそれは必ずしもマルクスの罪ではなくて、カントから新カント派に至るまでの間は、一般獨逸學界は正當にカントを理解しなかつたのだといつて、色々の面白い事例を挙げられたが之はそんなものかと私にとつて大變珍しかつた。その他カント哲學もその後の修正などについて話が出たが、日本の現状について知りたがといふことになつて豫てかゝることもあらうかと、日本の社會運動について私は獨逸文で書いたものを持つて行つたので、早速取りだして之を讀んで戴きませうといつて、一度ホテルに引返し更に晚餐に招かれることになつた。

夜は食事をしながら、日本についての文章は大變面白かつたがあれを私に任せて呉れないか、社會民主黨のゲゼルシャフト誌に掲載したいからといふことであつたが、之は熟考の上でといふこととして再び獨逸のことに話頭が及んで、氏は獨逸のマルクス主義者の書物の内で、近頃



最も注目すべきものはルカッチの *Geschichte und Klassen-Bewusstsein* だと強く賞められ、少し間を置いてそれにコルシュを追加された。更に社会民主党内に於けるエバンジェーリシュの人々の社会運動が看過されてならない、ハムブルグの教授ハイマン等が中心で *Religion und der Sozialismus* 誌がその機關雑誌であること、同時に右翼の「獨逸國粹黨」やヒットラー黨に近しが *Tat* 誌を中心とする一派の思想家が注目すべき存在だと注意された。實際タートといふ雑誌は評論雑誌として中々いゝものだとも兼々思つてゐたのであつた。夫人はプレスラウでも評判の賢婦人だといふことであつたが、折悪しく病床にあつて御目にかかれなかつた。が、この日の午後夜の會談はプレスラウまで出掛けた甲斐は充分にあつて、満たされた感じを以て翌朝伯林に戻つたのである。

(五)

昨年獨逸へ往つた時に、カウツキーはその前から永らくウィーンにゐて會へなかつたし、ベルンシュタインは病床にゐて誰にも面會を許さないと云ふことであつた。私の知人の社会民主

黨員はカウツキーと一緒に露西亞を旅行したことがあり、ベルンシュタイン夫妻とも親しかつたので、いつも口癖にベルンシュタインが病氣でさへなければ是非會はせたいのだがと云つてゐた。

昨年十二月十九日私は十日間の露西亞の旅を終へて伯林に戻つた時、家人が第一に私に告げたことはエドゥアルド・ベルンシュタインが昨日死んだと云ふことであつた。私は翌朝ベルンシュタインの記事を掲げてゐさうな新聞を買ひ集めた、が何と云つても社会民主黨の機關紙「フォルウエルツ」が哀悼最も切であつた。ヒットラーの新聞が割合に同情の意を表してゐたのに反し、共産黨の機關紙は頗る冷淡であつた。

ベルンシュタイン (Eduard Bernstein) は一八五〇年の一月六日に生れたから、今少しで八十三の誕生日を迎へる所であつた。その爲か葬式は翌年の誕生日を卜して、シェーネベルヒの墓地に於て行はれた。私はその葬儀の列に加はり、靈柩に従つて墓地まで往つたのであつたが、流石に獨逸社会民主黨の元老だけあつて、葬列は延々數丁に亘り、獨逸全國の黨の支部、労働組合消費組合の團體は勿論、外國の無産政黨からの代表者も加はり、道々樂隊の奏する哀悼の



曲をきいて、又素晴らしい長い行列をみて、足を停めた行人は皆靈柩に敬意を表した。それは社會民主黨の元老に對する弔意と云ふよりは、獨逸國民の元老に對する懇な追弔の心を籠めたものであつた。

墓畔では黨の首領パウル・レーベが追悼演説をし、各國代表者の弔辭が讀まれたが、ゲオルギエン、アルメーニア、パレスチナ等の代表者があつたのは、生前ベルンシュタインがいかに之等の弱小民族の爲に努力したかを物語るものであつた。音楽と合唱とを聴いて泌み入るやうな寂しさを感じられた時、空には三日月が寒さうに光つてゐた。

ベルンシュタインは獨逸社會民主黨内に修正主義の運動を起したことを以て有名である。修正主義とは要するにマルキシズムの自由主義化と云ふことに盡きると思ふが、彼は青年時代に自由主義の空氣を受け、後マルキシズムの熱心な信奉者になつたが、やがて英國に渡つてからそこで再び自由主義の影響を受けて、そこからあの修正主義が生れたのである。運動の起つた時にウイルヘルム・リーブクネヒトは、彼を評してマルクスの如き偉大な人は英國に渡つてもよかつた、然しベルンシュタインは英國に往つて英國に魅了されて終つたと云つたが、此の批

評の當否は別として、ベルンシュタインはいかにも英國に向いた人であり、又英國から受くべきものを受けた人だと思はれる。修正主義の長所も短所も自由主義から來てゐるのである。彼は多くの自由主義者のやうに寛容であり、そして又教養が廣かつた。多くのマルクス主義者の持つやうな固陋や偏狭さや視野の狹隘さがない。その晩年は青年黨員の教育に心を注いで、諄諄として倦まない彼は、遂に人をして「然り」と云はしめずんば止まない天才であつたと云ふ。又死ぬ數日前病床でラヂオのベートーベンの曲を聴いて非常に嬉しさうであつたと云ふ。カウツキーとベルンシュタインと云ふと、いかにも歴史上の人物と云ふ氣がして、今も尙生きてゐる人と思はれない位であるが、半世紀以上獨逸社會民主黨を指導した元老の亡くなつたのを見て、歴史が一廻りしたと云ふ感が出て、寂しさに堪えない。それにしてもカウツキーが尙健全であるのは、いとも頼もしい事である。昭和八年四月廿四日五月一日八日十五日「帝國大學新聞」



## (二) 露西亞の旅

## (一)

露西亞は私にとつて親しみのある國ではなかつた。私共と同年輩の人々が學生時代に帝政時代の露西亞文學者、ツルゲネフ、トルストイ、ドストエフスキー、チエホフと云つたやうな人から、露西亞の國と人との親しみを持つてゐた時に、私は露西亞とは離れた雰圍氣の中に暮してゐた。革命が起つて若い人々の血を躍らした時に、私は農商務省の屬僚として、工場法の事務に没頭してゐて、革命と云ふものとは縁の遠い所で働いてゐた。かうして昔の露西亞も今の露西亞も、私には隔りのある未知の國であつた。然し昨年四月日本を立つて歐羅巴へ向つた時には、露西亞へ旅することは私の計畫の中の大きな部分を占めてゐたのである。世界に於ける唯一つの社會主義國、それを見ることがたとへそれ丈で大した收穫はないにしても、之からの研究に縁故を付けるものとして、全く新しいものに觸れる時に覺えるやうな不安と好奇心と

に満ちてゐたのであつた。

丁度時期も恵まれてゐた。革命十五周年紀念と五箇年計畫の完成と云ふことで、昨年は露西亞にとつて祝祭の年であつた。平生は獨逸から露西亞へ旅行するのに査證などで色々厄介な事が多いのに、昨年は露西亞政府の經營するツーリストが色々種類の違つた團體旅行を企て、極めて便利に旅行が出来るやうに出来てゐたので、私もそれで露西亞を覗いてみようと思つてゐた。

然し伯林で聞く露西亞の旅行は甚だ無氣味なものであつた。日本人には滿洲事變以來兎角敵意を抱いてゐるとか、汽車の中でもホテルでも窃盜の危険が多いとか、ホテルの設備が悪くて寢具や食物が不足して健康に害があるとか、色々噂が耳に入る。一方ではあるマルクス主義者の教授に話をすると、君の専門からいつて是非露西亞は往かなくてはならない、不安などと云ふものは少しもない。不安と云へばナチスと共產黨とが對抗して今にも内亂の起りさうな獨逸の方がよほど危険だと云ふ。然しある親しい獨逸の文學者は、どうあつても露西亞旅行は止めて欲しい、今の露西亞は往くには餘りに冒險だ、あなたは妻や子や友達のことを考へないのか、



それでも押し切つて往くのは利己主義者だといつてどうあつても引留めて離さない。餘りに熱心に云ふので、私も遂に延ばし延ばしして昨年の暮近くになつた。その間に露西亞に關する智識が少し宛殖えるに連れて、今は何と云はれても往かうと決心して、その文學者に話してみたら夏頃から見ると日本と露西亞の國交が大變好轉して來た。今なら往つて大丈夫でせうと云ふので、自分は心置なく伯林を立つことになつた。私の露西亞旅行に就ての獨逸人の意見をこゝで書いたのは、露西亞に近い獨逸の人でさへ露西亞をどう思つてゐるかが分ると思つたからで、智識階級の人々にすら露西亞は不安定な無秩序な國だと考へられてゐるのである。

## (二)

ツーリスト・ビュローの團體旅行には、學者の團體とか技術家の團體とか會社員労働者の團體とか、色々に分れて夫々日程も違ひ費用も違つてゐる。私は費用が安いと云ふことと労働者と一緒と云ふことが、却て面白い副産物もあるかも知れないと思つたので、會社員労働者團體の方に加入した。伯林を立つてモスコイ三日レンングラード三日で伯林へ戻るまで前後十日、

汽車は勿論三等だが寢臺もあり、ホテルの宿泊食事から、市内見物の大型自動車、英佛獨語の通譯を付けて全部が二百マルク内外と云ふ素晴らしい安さである。外國貨幣を欲しがる露西亞がいかに苦心慘憺たるものか之でも分ると思ふ。

十二月十日夜伯林を立つ、一行十七名大體は獨逸人だが外に和蘭人、佛蘭西人、西班牙人、亞米利加人がゐる。獨逸人の中には南獨逸の會社員が一名ゐたが外は全部共產黨員のやうであつた。その晩は寢臺がなくて腰掛けたまゝで夜を明かす。周りの人達の話をきいてゐると、和蘭人は建築の技師でモスコイへ職を探しにゆくらしい。自分の設計した建物の寫眞を澤山みせて新しいデザインの講義をしてゐる。西班牙人は最近の自國の革命を話す。之は畫家らしい。佛蘭西の若い婦人は大學を卒業してドクトルになつたので、學位論文の話しながら學位證書を示したりしてゐる。周囲の人は自慢話を感心したやうな又不愉快さうな顔をして聞いてゐる。亞米利加人は服装に凝つた伊達者で之は共產黨とは凡そ縁の遠い觀光客らしい。之が佛蘭西の女ドクトルに關心を持つたとみえ、盛に好意の押賣りをしてゐる。かうした情景を載せて汽車は翌朝ワルソーに着いて一時間程停車した。



ワルソーは有名な拘摸の都である。一旦下車して待合室の食堂で珈琲を一杯飲んでから、汽車の中で私獨りで待つてゐると、カバンを下げた波蘭人が二三名室へ入つて来て、何やら喋るが棚の私のカバンを側へ寄せて自分のカバンを載せさせて呉れといふので、立ち上つて場所を作つたらやがて外の室へ出て往つたが、又やつて来て私に又カバンを動かさせた。その時は少しも気が付かなかつたが汽車が出てみたらあちらからもこちらからも、紙入を拘摸れたと云ふ聲が聞えて来た。私は兼て旅行前に波蘭と露西亞の拘摸を用心するやうに聞かされてゐたので、紙幣丈はズボンのポケットに入れてゐたので之丈は助かつたが、上衣のポケットに入れた紙入と手帳とがなくなつてゐる。大して損害でもないが惜しいなと思つてゐると、室の隅に抛つたものとみえて之ではないかと人が出して呉れた。察する所始め来て私が棚へ手をあげてゐる時に紙入を窃み、向ふで中をみて金がないので又来て手帳を窃んだ、どちらも物にならないので捨てたものらしいのである。外の人はデッコキの内ポケットを鋭利な小刀で切られて金をとられたと云つて警察への届書を書いてゐる。國際的拘摸の都ワルソーと云ふ印象がその後何日迄も頭を去らなかつた。

その日は美しい夕焼が見られた、暗くなつてから月が西の空に出た。四時波蘭と露西亞との國境を通る。そこには小屋があつて兵卒が銃剣をつけて歩いてゐた、流石に共産黨員が多い丈にその時の車内は非常に興奮して、露西亞語の出来る獨逸人が窓から首を出して演説口調で挨拶をする。それが終ると皆一齊に拍手してやがて聲高らかにインターナショナルを歌ひ出した。かうして私は始めて未知の國露西亞へ足を踏み入れたのである。

## (三)

露西亞へ入つてからの最初の停車場で汽車から下りて、嚴重な荷物の検査を受けた。税収入の目的からではなくて、寫真機械や武器の調べが綿密で、それと持金は全部みせて總額の證明書を貰はなくてはならない。之は一つは外國で安くルーブルを換へて持込むのを取締ると、歸りに國境を出る時の所持金との辻褄を合はせる目的のやうである。検査所の壁にマルクスと萬國の労働者よ團結せよ」と云ふ言が、英獨露の國語で彫り付けてある。検査を済ませてから食堂へ入ると、どこもかしこも五箇年計畫の宣傳ポスターで一杯である。やがて寢臺車に乗り換



へて一路モスコイへ向ふ。露西亞では同じ寢室に男女を一緒に入れることを何とも思はない。佛蘭西の女ドクトルと私とが組合はされたので、之は外の婦人と入れ換へて貰つて、三等寢臺の上に身を横へた。此の寢臺は扁平な板の上に藁蒲團を敷いてある丈だし、外の國のと比べるすとずつと高いから、寢相の悪いものは落ちる危険が多いし落ちたら傷をするに定まつてゐる。私も夜中に向ふ側の人に起されて、君危い今少しで落ちる所だと注意された。それから後眠れなくてみてゐると、その御當人も亦度々危機に瀕してゐた。外には盛に雪が降つてゐて、一面の白い野原を飛ぶ楯が見える、十二日朝十時モスコイに着いた。

ホテルに着いて朝食を済ませてから、午後はシャラバンで市中見物に向ふ。婦人の通譯が付いて、英佛獨何れでも説明して呉れる。クレムリン宮、レーニンの墓、飛行場、大競技場などを大急ぎで廻るが、どこでも始めて着いた都を自動車で見物する時のやうに落付いた印象がえられない。夜は映畫館へ往つた。大變な人混みである。寫眞の技術は優れてゐるが、筋は勞働者のストライキを題目としたもので、寧ろ小供らしい幼稚なものであつた。露西亞の物と云ふと何でも感心する獨逸の共產黨員も、映畫だけは不足だとみえて、あれを獨逸へ持つて往つた

ら誰も見に来るものはあるまいと云つてゐた。

ホテルは外國人の爲に急いで建てたものらしい、勿論洗面場に湯が出ないとか便所の水の出が悪いとか云ふ缺點はあるにしても先づ先づ良い方だと云つて差支ない。人の云ふやうに南京蟲もゐないし、食事などは西歐羅巴のホテルと比べて少しも遜色がない。ホテルの賣店で賣る商品は、亞米利加や獨逸の金で定價がつけてあり、露西亞の金よりも外國の金の方を歓迎する。ルーブルに換算して貰ふと大變高い率で換へられて、後でルーブルを外國貨幣にはどうしても取換へて呉れない。外國の金を掴んだら最後どうあつても離さないと云ふ恰好である。

翌朝は私獨り一行と離れて市街を歩いてみた。十二月の半ばと云ふのにモスコイの冬はそんなに寒くはない。伯林あたりと比べて少しも違ひはない。勿論地面は凍りついてゐて、馬は滑つて走りにくいやうで、私も一度は仰向に仆れたことがあつた。然し雪が毎日降るほどでもないし手足が冷えるかと云ふほどの事もない。往來は非常な雑踏で、どうしてこんなに多數の人が歩いてゐるのかと訝られる位である。革命前九十萬の人口だつたモスコイが今は三百萬になつたからだとも云ふし、住宅が不足し家内にゐるのが不愉快だから外を歩くのだとも云ひ、交通



機關が悪いから徒歩するからだとも云ふ。ともかく街の中心でもない所に夜の銀座のやうに人が押し歩いてゐる。何しろ人口一億六千萬、人種二百と云ふのだから、その人々の顔は種々様である。ここでは蒙古人種と思はれる顔によく出會ふ。服装はどれもこれも見窄らしい、丁度滿洲の市街で出會ふ支那人と云ふ格好其の儘である。露西亞は歐羅巴と亞細亞との中間だとよく云はれるがいかにも西歐羅巴からみると田舎へ來たと云ふ感じ、亞細亞に近いと云ふ感じがする。

交通は非常に不便だ、地下鐵道はなし乗合自動車はなし、タクシーは探すのに一時間もかかるほど街中では見當らないし、唯一つ電車がある丈である。従つてその電車の混雑は到底東京人の想像の及ぶ所ではない。乗つたら最後降りるのは大事だし、外側の窓には鈴なりに人がブラ下つてゐる。七十近いと思はれる御婆さんが、遠慮をしてゐては生存競争の今の世の中に生きてゐられないと云はんばかりに、肘を張り人を突き除けて降りて往くのがいかにも無慘である。車中が雑踏してゐるから車掌——皆婦人のやうであるが——は一ヶ所に腰かけてゐて切符を賣りに廻らない。車中の人から手へ手へと金を廻して、車掌から切符と釣銭とを貰つて又その人

の所へ廻してゆく、之は面白いやり方だと思つた。

## (四)

その日の夕方は一行と共に「農民の家」と云ふのを見に出る。農産品や鳥類畜類などを陳列し、農産奨励の爲に栽培收穫の技術を教へ農民の保健衛生設備を整へ、その上に農民の法律上の相談に應じ、兒童の教育娯樂の事にも従ふ。建物は中々大きなもので農民の會議場や消費組合に關する機關もその中に含まれてゐる。日本の農事試験場と衛生試験場と英米のセトルメントとを併せたやうな設備である。露西亞の農業が最近どれ丈發達したかと云ふ統計や寫眞、農民の中に花柳病がどんなに減少したかと云ふ統計等が澤山集められてゐる。獨逸の共產黨員は歸つたら報告演説でもしなければならぬのだらう、一生懸命に手帳に筆記してゐると、亞米利加の伊達者がそんな下らない事を一々書くたと云つて側から冷笑してゐる。自分は此の「農民の家」を見巡りながら此の中に露西亞と云ふ國の特殊性が窺はれると思つた。農事試験場や衛生試験場は他の資本主義國では、資本主義の立場から夙に發達してゐるのである。そし



て同時に農民の生活上と云ふ目的から設備は、それとは違つた思想から違つた人々の手で違つた場所で行はれてゐる。露西亞では革命前の資本主義時代に、他の資本主義國の企てた農業の生産奨励が充分に行はれてゐなかつた、その爲に農村の社會問題と農業の生産奨励とが、同じ時に同じ人の手によつて同じ設備の中で一緒に行はれてゐるのである。資本主義國としては遅れた國、社會主義國としては先驅をなした國の一種特有の組み合わせがみられる。之は露西亞の色々の所に現はれてゐると思ふ。

その夜は日本大使館から招待を受けて、久振りに日本食の御馳走になり、露西亞に駐在する外交官としての立場から露西亞に對する觀察を聞いた。それは色々の點で有益ではあつたが、その人の迷惑になることを恐れて、こゝには書かないことにしよう。送られてホテルに戻つてから私は考へた。露西亞は之からの日本が是非とも研究しなければならぬ國である。共產主義者は露西亞を研究してゐるだらう、然し共產主義者の露西亞研究には自ら一種の限界がある。それは共產主義の立場に支配されてゐると云ふ丈でなしに、露西亞の研究に一番大切なのは西歐羅巴殊に英獨との比較である。然し英獨を研究してゐてその上に露西亞の研究の出来る共產主

義者と云ふものはさう澤山あるものではない。共產主義者でない立場の人から、露西亞研究の専門家が日本に出て來なくてはならない。私は始め今度の旅行はほんの十日にして、その具合によつては今一度出直して一ヶ月位逗留してもよいと思つてゐた、モスコゝにゐた僅に二日の間に私は露西亞に對する興味を唆られたと共に、露西亞を研究することが英米獨佛などに比べて非常に困難だと感じた。當方が露西亞語が分らないのと、向ふが外國語の智識が少いのとで、外國語の出来る特殊の人に連絡を付けるか通譯をよほどよく活用するかど必要になるし、それにはかなりの金を使ふ覺悟がなければならぬ、よし又永く逗留して金を使ふとしても特別警察の監視の眼が鋭くて、とても自分で露西亞人の生活の中に混つて何か独自の觀察をする譯には往かない。そこで私は再度の露西亞入りを断念した、數年の後に充分の準備を整へた後でなければ、露西亞に一ヶ月か二ヶ月滞在することはさしたる効果があるまいと考へたのである。

## (五)

その夜床に就いてからジノヴィエフの獨逸語のレーニンの傳記を読んだ。その土地へ來てそ



の人のことを讀むのは、殊更に興味の深いものである。中々巻を描くことが出来ないで讀み了へたのは曉近くであつた。起きて一行と共に紡績工場を見に往く。日本の工場を澤山見てゐる私から見ると、設備も古いし機械もよくはない。南米に輸出するのに忙がしいと云つてゐた。労働者の爲の食堂醫療室娛樂場なども格別珍しいことはない。食事は大變安いので例の亞米利加人が安い食事で美人の給仕、何と間がいゝんだらうと云つたら、獨逸の共産黨員が彼奴又あんなことを云つてゐる、あんな奴は一行から除名しろとカンヅに怒つてゐた。

戻つてから私だけ自動車を一臺雇つて、マルクス・エンゲルス研究所へ往つた。自動車は素晴らしく高い、一時間で二十五マルクである。運転手が間違へてレーニン研究所の門前へ着けた。入つて門衛に獨逸語の名刺を渡すと、どうしても讀めないし言葉がさつぱり通じない。とかかくしてゐると英語の出来る婦人が出て来てやつと話を通じたが、少し待つて呉れと應接室で待たされて中々顔を出さない、待つてゐる間の自動車賃を思ふと氣がでない。仕方がないので出て勝手に中を歩き出したら、最前の婦人に出會して圖書閱覽室カード室書庫など見せて呉れた。閱覽室で一人の日本婦人と思はれる人を見かけたが、恐ろしい顔をして睨めてゐた。日

本の役入とでも思つたのではないかと思ふ。亞米利加のニグロの婦人がタイピストをやつてゐるが會はないかと云ふので紹介された。露西亞人からみるとニグロがタイプライターを打つのが珍らしいものとみえる。それと異人種同志で日本人が懐しいと思つたものとみえる。當方から云へばニグロが珍らしくもなしそれに會ふよりも自動車の方が大問題なのが、仕方なしに然るべく愛嬌を振り撒いて大急ぎで自動車に乗つた。マルクスエンゲルス研究所とアドラツキーのことを聞いたら、隣の建物だから是非會つて往けと云はれたが之は割愛することにした。

その夜は一行と反宗教博物館へ往く。僧侶の裏面の生活や支配階級と寺院との關係などに就て、色々の材料を集めてある。少し材料が多すぎてどいのと、室の配置の仕方がよくないと思はれた。その夜九時半の寢臺車で獨逸の會社員と二人丈でモスコウを立つてレーングラードへ向つた。之等萬般のことはツーリスト・ビュローがやつて呉れるが、之は實に至れり盡せりで遺漏のないには感心した。

朝九時にレーングラードに着く、朝食を終へて十一時になつてもまだ暗い。よほど緯度が北



になつてゐるなと思ふ。帝政時代の役人は十一時に出勤して一時迄仕事をし、中食に自宅へ歸つて四時に又出て来て六時に退廳する。そして法外の高給を貰つてゐたと聞いてゐたが、その怠惰の罪は免れないが、朝十一時が此の暗さでは出勤の遅れるの丈は説明が付くと思つた。

## (六)

工藝展覽會や美術展覽會を廻る。工藝展覽會は機械器具などを陳列し、色々の統計表が掲げられてゐる。その中で水力電氣に重きを置いてゐるのが眼に着く。美術展覽會は古い美術の新しいのと二つ別々になつてゐる。新しいプロレタリア美術の方にはグロテスクのが多い。やはり私には古い美術の方が親しみがあつた。尤もその方は巴里や維那を見てゐる人には特別のものではないけれども。有名なる冬宮、その前の廣場を歩くと兵隊が訓練をしてゐる。此の廣場が露西亞革命史には切つても切れない血腥さい記念の場所である。冬宮の側を通るとネバ河の沿岸に出る。そこにある大きな橋が市中と郊外とを連ねる橋で、あの一九〇五年一月の革命の時にキリストと皇帝の肖像を行列の先頭に掲げ、僧正ガボンに導かれた労働者が郊外から冬

宮へと嘆願に練り込んだ所である。その行列は決して革命的のものではなかつた、唯皇帝の御慈悲に縋ると云ふ穏和なものであつた。警察官はそれを許可したが警察と軍隊との連絡がよく保たれてゐなかつたものと見えて、橋の上へ行列が進んだ時に、手前に屯しゐた軍隊が發砲して澤山の死傷者を出した。之がその年の所謂第一次革命の端緒をなすに至つたのである。行列の先頭にはガボン僧正と労働組合の首領とが並んでゐたが、發砲と知るやその首領は流石に長い間の経験で僧正を促してすぐ地面に臥して了つた。その爲に二人は傷を受けなかつたと云ふ話である。ネバ河の岸は氷つてゐたが中央には水が流れてゐて、遙かの向ふにクロインスタットの要塞が見える。

レニングラードの街には雪もなく氷もない。雪解けがしたのか往來は泥濘靴を没するばかりである。モスコイが首都となつてからは人口も減り、いかにも寂しい舊都と云ふ感がある。吾吾を案内した通譯は廿三四の智識的の婦人で、英佛獨の三國語を自由自在に操る。通譯には特に政府が人選を嚴重にするものとみえて、共產主義に對する信念は中々強い。同行の獨逸人は共產主義に懐疑的な人で、色々質問をしてゐたが答へる方には、その質問の意味が充分分り兼



ねるし、答へられる方では答へに満足しないやうである。今の露西亞では廿五の人は革命の時に十歳で帝政時代のことをよく知らないし、成長期は革命時代を過してその後は外國の事情は全く知らされずにあるので、他國と露西亞との比較と云ふことが全く出来ない。獨逸人は云つてゐた、あゝして外國の事を知らずに露西亞の事を知つて、それが絶對的のものと教へられてゐる人は幸か不幸か分らない、あの婦人などもあれが巴里か伯林で育つたらすつと違つた人になつたに違ひないと。

## (七)

翌日は小學校を視察しに往つた。一體に西洋の小供はさうだが、こゝでも外國人が來たと知ると、遊んでゐた小供達がいかにも歓迎するやうに周圍に集まつて來た。ニコニコして嬉しさうである。色々の教室を廻つて獨逸語の室へ往くと、十歳位の子が教師に名指されて獨逸語で簡単な歡迎の辭を述べた。小學校で物理や化學を教へる、數學の智識が充分になくてどうするのかは尋ねてみなかつた。機械作業には重きを置いて、モーターを動かしたり電氣装置をした

り鉋で板を削つてゐたりする。前にはかうした筋肉労働には一番時間をかけてゐたのが、その後讀む力書く力考へる力がまるで延びないと云ふことに氣が付いて、昨年八月から規則を改めて餘り機械作業に偏しないやうにしたのだと云ふ話である。

終りに婦人の校長に會つて色々の質問を試みた。時に校長は今露西亞では小學校の兒童の就學率は九〇何パーセントとかで大變自慢にしてゐた。私は外の場合にもよく感じることでその時感じたのである。露西亞の人はその就學率を非常に誇りに云ふのであるが、百に近い就學率を持つ日本人や獨逸人から見ると、それが格別自慢にも當らないといふ氣がする。露西亞人はそれを自慢にするばかりでなく、それが革命の賜物だと思ひ込んでゐるのである。所が日本や獨逸では社會革命とは全く無關係に、資本主義國として露西亞以上の就學率を示してゐるのである。こゝに露西亞人の他國に關する知識の缺乏と、露西亞と云ふ國の特殊性がある。つまり帝政時代の露西亞は實に就學率が低かつた、それが革命後になつてよくなつた事は事實である。だから露西亞人が自慢する場合には外國と比較して自慢してゐるのではなく、自國の帝政時代と比較して自慢してゐるので、それを革命に歸してゐるのも間違ひではない、確かに



革命政府がやつたに相違ないのである。然しその事は露西亞に就て云へる事で、他國では夙に教育が普及してゐて、そしてそれは社會主義とは縁もゆかりもない資本主義國で行はれてゐるのである。就學率と社會主義とは外國では關係がないのであるが、露西亞ではそれを分離しては考へてゐないので、そして社會主義を禮讃してゐるのである。

私はこゝにも露西亞の特殊性があると思ふ。現在の露西亞を判斷するには、私共は常時帝政時代の露西亞を引き離して考へてはいけないと思ふ。帝政時代の露西亞は西歐の文明國と比べて話しにならない位遅れてゐたのである。他國が資本主義國として爲した文化が、露西亞では帝政時代に不足してゐたのである。従つて露西亞の社會革命は資本主義を社會主義にする丈でなしに、他國が資本主義時代になし遂げた事をも爲さねばならぬ負擔があつた。その代りに社會主義とは關係のない仕事も社會主義からの賜物として感謝されてゐるのである。露西亞人が今感謝してゐる文化は實は他國では資本主義國として夙に味ひ盡してゐる。露西亞人は革命を禮讃してゐる時に口では資本主義國と比較してゐながら、その實は自ら知らずして自國の帝政時代と比較してゐるものと、私共は考へていゝのである。

よく露西亞から歸つた人に對して、露西亞人は幸福かどうかと云ふ質問が出されるが、此の間に對する答へも露西亞を露西亞として觀察すると、露西亞の制度を外國へ移した場合とを區別しなければならぬと思ふ。帝政時代が餘りに低くあつた露西亞人は現在の方が幸福だと云へると思ふ。それは露西亞の制度がよいからと云ふのではなくて以前が餘りに低かつたからである。然しだからと云つて現在の露西亞の制度を、そのままに他國へ移して國民が満足するかどうかと云ふとそれは自ら別問題である。露西亞を語るに就ては常に帝政時代の露西亞を念頭から去つては的を失すると思ふ。

## (八)

その夜は劇場へパレーを見に往つた。露西亞では勿論第一だし歐羅巴でも、一二を争ふ大きな劇場である。「佛蘭西革命の焰」と云ふのが出し物であつたが、その花形の男と女との踊りは素晴らしいものだと思つた。僅か十マルク位で一番正面の上席を占めたが、そこは帝政時代に皇帝の席であつたと云ふ。観客に美しい衣を着飾つた人の多いことは外の國と違はない、唯控



室などで他國ならば控目にしてゐる粗服の人々がこゝでは平然としてゐられることが幾分違ふ點だらう。

翌朝は革命博物館を見に往つた。之が露西亞で見たものの中で一番私には印象が深かつた。古い時代からの革命の材料を蒐集してあるので、革命家を鎖で繋いで雪のシベリアを歩かせた光景、革命家を運んだ猛獸を入れるやうな列車、囚人が起居する監獄の模型など、實に慘氣鬼氣人に迫るものがある。レーニンが囚地で「露西亞資本主義發達史」を書いた時の原稿參考文獻などが集められて一入興味を唆られた。此の博物館こそは二日も三日もゆつくりと見て歩きたいと思つた。

帝政時代には随分取締が峻厳であつた。それなのにあの取締には澤山の穴があいてゐたやうである。隣りの縣へ逃亡するともう助かつた、監獄へ差入れる書物は看守が讀めないで、革命家は多くは監獄の中で革命思想の勉強をした。少し差入れの書物を調べるやうになつてからは、始めの所へ繪本の繪を貼り付けて置くやうに許されたものださうである。あの一九〇五年後の反動時代に、ベテルブルグの警視總監をして檢舉に功績を挙げたと云ふ人が今七十餘歳

で伯林に亡命して「伯林繪入新聞」に八九回に互つて當時の物語をしてゐたが、それによるとある貴族の十八の娘が革命黨員で宮中へ侍女として忍び込み、宮中の園遊會の時に花賣娘になつて皇帝に接近し、花束の下に隠したピストルで皇帝を打つ計畫であつたと云ふ。幸か不幸か偶然にその園遊會は中止になつて皇帝は命拾ひをしたが、さうした革命黨員が宮中へまで忍び込める所に彈壓政府の取締に大きな缺陷があつたのだと思ふ。一部の支配階級が彈壓をしてゐても、一般の下僚がその彈壓の意味を理解しない所では、結局澤山の遺漏が出来なくてはならない。取締ばかりではなく一般に限らず、民主的でない專制政治が往き届かないと云ふことの好個の事例である。此の博物館を眺めながら專制政治の強さうで脆い危なさを泌々と感じさせられた。

その午後私は獨逸人とも別れて唯獨りレニングラードを立つてリガを経てケーニヒスベルグへと向つた。車中いかにも露西亞農民の代表型とも思はれる朴直の農民と差向つて、向ふの煙草を貰ひ當方の菓子を贈りながら駢足旅行の一週間を回顧してみた。之と云つて纏まつた收穫はなかつたにしても、露西亞と云ふ國への親しみ丈は充分に持つことが出来た。之から書物と



新聞雜誌で此の國を絶へず考究して往かう。此の意味で急がしい此の旅は私の住む世界に一つの新しいものを開いて呉れた、それが大きな獲物でなくて何であらう。汽車が獨逸の國境へ入つて電燈の光眩いチルシットの街を眺めた時に、双肩から重荷が下りたやうな氣がした。露西亞には何の不安も不秩序もなかつた、然し道徳も法律も一切のイデオロギーの違ふ國から出てみると、やはり知らない内に緊張してゐたのであらう。その夜ケーニヒスベルグで泊り翌朝カントの墓にお詣りに往つた。前を通りすがつた人が墓に向つて鄭重な御辭儀をしてゐた。此の墓の下に在る哲人と露西亞を揺り動かし革命家とを思ひ比べてみた。そのどちらもが此の世に必要なものではあるが、此の哲人の中にこそ「永遠の教養」があるのだと思はれて、靜かに敬虔にその前に頭が下がつたのであつた。

昭和八年十一月號「經濟往來」

### (三) 八年振りの英國

#### (一)

今年一月廿六日自分は伯林を立つて倫敦へ向つた。獨逸に於ける滞在が段々と遅れて、英國へ立つのが遂に延びて了つたのである。英國は自分を育てて呉れた國である、たとへ今度の旅行は主として獨逸を研究することを目的としてゐたとは云へ、それでも懐しい英國へ少しでも足を停めることは、始めからの私の計畫であつた。

此の前英國へ着いたのは一九二三年の一月であつた。丁度労働黨が自由黨を飛び越えて、反對黨の第一黨となつた時であり、次でその年の總選舉の後には自由黨の援助の下に第一次労働黨内閣が出来たのであつた。ラムゼー・マクドナルドを首領として労働黨は冲天の勢であつた。その時に英國に滞在してゐた私は、それから色々の刺戟を受けた、私の現在の社會思想を決定して呉れたのは、その當時の労働黨をまさまさと眼の前に見てゐたことである。それから



大陸へ渡つて亞米利加への途中に、も一度英國に寄つて一ヶ月以上滞在したことがあつた。その時はもう労働黨内閣は瓦解して、歴史的の保守黨の天下であつた。英國へ着いた自分は僅かの間に、變りはた英國だと感じない譯にゆかなかつた。だが日本へ歸つてからの英國は、もつと著しい變化を次々に繰返して來たではないか。

一九二六年の五月には、石炭坑夫を始めとし數百萬の労働者が同盟罷業をして、一週間英國の産業界を混亂に陥れた。あれを轉機として保守黨政府は數々の労働運動を壓迫する法律を作つた、でも一九二九年五月には労働黨は到頭第一黨となつて、第二次労働黨内閣を作ることになつた。その時私は労働黨の社會主義とマルキシズムとの差異を説き、又マクドーナードに就て評傳を書いたことがあつた（『英國労働黨のイデオロギイ』千倉書房發行）、何れも労働黨の飛躍を喜んだ爲であつた。だが一九三一年の夏の恐慌とそれに伴ふ労働黨内閣の瓦解、マクドーナードやスノーデンの労働黨との分離、國民内閣の成立、十月の總選舉による労働黨の無殘な敗北は日本にゐる私共にとつて大きな驚異であると共に納得の出來兼ねることが多かつた。マクドーナードの労働黨か労働黨のマクドーナードかとまで考へさせた人が、労働黨から分離して労働

黨を敵として戦ふと云ふこと既に不可解であつたが、更に總選舉に於けるマクドーナードやスノーデンの態度をみると、今迄考へてゐた此の人達とは似もつかないやうにさへ思はれた。英國へ渡つて當時の真相を明かにしてみたい、之が獨逸を立つ時の私の一つの問題であつた。

私は一九二五年に歸朝してから後、専ら英國思想の研究に従つて來た。グリーン、ケヤード等のオックスフォードに起つた理想主義は數年間の私の研究題目であつた、そしてその理解と批判によつて私の眼は徐々として開かれて來た。そして今度獨逸へ來たのは、漸くマルキシズムへ研究を轉じる時が來たからであつた。然し理想主義に對立してゐるのは、マルキシズムばかりではない、同じ英國に起りつつある實在論が、どう云ふ風に理想主義を批判しつゝあるかを見てみたい、之が私の英國での第二の問題であつた。

## (二)

獨逸を立つ前に英國の舊知の人々に手紙を書いて、英國の滞在は短いから都合をつけて會つて呉れるやうにと打合せをして置いた、そして私は一月末に和蘭を経てホークからハルウィツ



チへと海峡を渡つたのである。私は英國海峡を渡つたことは今までに七回に互つたが、之は船に弱い私にはいつも苦難の種であつた。ホーク・ハルウィッチ線は丁度八時間程かかり、夜ならば眠ることが出来るので、私は此の線を選むことにした。案の如くに海は荒れてかなりには揺れたが出立前の数日睡りの不足してゐた私は、船床に身を横へるや否や前後も知らずに深い眠りに落ちて了つた。ドアを敲かれて起きてみると、もう船はハルウィッチに着いてゐた。休憩室で珈琲を一杯飲むと僅に二片である、獨逸のカフェーで一杯四十五片に慣れて來た私は英國の珈琲は安いなと思つた。普通の爲替相場で勘定すると、獨逸では廿三四錢なのが英國では八錢にしか當らないのである。

税關の手續を済ませて、プラットフォームに待つてゐる倫敦行の列車に荷物を載せてから、まだ夜の明けきれないプラットフォームを歩きながら、到頭英國へ來た、八年前に去つたあの英國へ來た、之からの二週間の生活で自分は満足して此の國を立てるかどうかと考へに耽つた。見知らぬ國へ着く誰でもが、好奇心と不安とが交つた一種の感じを抱くだらう。私には不安は少しもなかつた、唯故郷へ戻つたやうな懐しさと、短い期間に出来る丈の能率を挙げようと云

ふ焦慮とに満ちてゐた。

走る走る只管に走る列車は、遂に自分を倫敦のリバプール・ステーションに運んだ。長くはない滞在だし宿を探すのも面倒だからホテル住ひをすることにし、それには安くもあり便利でもある日本の旅館トキワに定めて、タキンをそこへ走らせた。シチー、ストランド、トラファルガル・スクエア、チェアリング・クロッス等、豫て馴染の街々を通つて、その昔の事共を追想してゐる内にホテルに着いて、ひと先づ倫敦生活の落付き場所は出來た。

部屋で荷物を取り出してゐると、早速電話がかかつて來た、倫敦大學のユニバーシティー・カレッジのマクマレー教授からである。至急に會はういつ來られるかと云ふ、午後に出向くと云ふことにして電話を切つた。同氏は前の英國滞在の時オックスフォードでの私の個人教師であつた。ベリオル・カレッジのフェローをしてゐて、専門は哲學であるが社會思想や政治思想にも深い研究をしてゐる人で、今も同氏から受けた示唆は私の感謝してゐる所である。その後抜擢されて倫敦大學の教授となり、今は押しも押されもしない英國哲學界の花形である。昔世話になつた若い人でその後に出世をしてゐるのをみるとは、自分のことのやうに嬉しいもので



ある。早速午後ユニバーシティ・カレッジに往つてみると、氏は昔なかつた顎鬚をはやしてゐて、いかにも哲人と云ふドッシリした面影に見えた。此の日は之からの豫定を打合せの丈にして、何れゆつくり私宅に招かれる約束をして別れた。

## (三)

その足で領事館、正金銀行、郵船會社と廻つて急いで用事を済ませてから、共産黨書房へと寄つてみた。小さな店ではあるが共産主義に關する書物雜誌ばかりを賣つてゐる。そこを丹念に廻つてみて、どんな本が英譯されてるか、どんな本が賣れるかを覗いてみた、前回の時からみるとかなりマルクス、エンゲルス、レーニンの本が澤山刊行されてゐるし、相當に賣れてゐるやうでもある。三十一年の恐慌以來英國の勞働界と智識界にマルキシズムへの興味が擡頭して來たことは考へられることであるが、私は此の書房を一巡してすぐにさう思つた。

英國のみならず、他の國でも、大規模の書店が各種類の書籍を一つ所に並べて、自由に覗いてみられるやうにしてゐるのは妙い。殊に少し學術的のものや、或は社會主義や共産主義の本

などになると、普通の本屋には中々見當らない。此の點で日本の書店は中々便利である。外國の本を扱ふのも丸善ほどの外國にも妙いし、多種類の書物を並べてゐる點では東京堂や三省堂ほどのものは稀にしか見當らない。そこで勢ひ各主義の政黨の附屬の本屋へ廻ることが必要になつて來るし、又最近刊行の學術書をみる爲には大學附近の書店を覗く必要が起る。倫敦ではスクール・オブ・エコノミックスの本屋に往つて、棚や机の上に並んでゐる本を見廻すと、最近の出版書が分るし、大學が參考文獻として指定してゐるのがどんなものが大體見當がつく。それで私は時々かうした大學附近の本屋を廻ることにしてゐた。

共産黨書房を出てからフェビアン協會の書房に往く。之は尙小規模だがフェビアン協會の出版物は勿論、その外にも廣く社會問題に關する文獻を賣つてゐる。以前はよくこゝへ來ては書をひやかしたものだ、その當時の年老いた掛りの人が今でもゐて、すぐ私を思出して呉れて、あれから何年になりますかねと云ふので、こゝへ來てからはざつと十年にならうと云つてゐる内に、急いで階段を上つて往つたが、下りて來て今ガルトン氏が階上にゐてあなたに會ひたいと云ふからと云ふので、思ひもかけず氏に再會することが出來た。



## (四)

ガルトン (Garton) 氏はエドワード・ピース——あの「フェビアン協會史」を書いた——の後を繼いで、フェビアン協會のセクレタリーを永く努めてゐる人である。氏には「洋服業に於ける労働」と云ふ著書もある。血色のよい、丈の高い、發音の明晰な、そして愛想のよい、然し要領よく話を切あげて相手を返して了ふ人である、氏が「扱」と云つて腰をあげると、相手も釣り込まれて椅子を離れざるをえなくなる。多忙な事務を處理してゐるものは、かうでもしなければならぬのであらう。所が久振りで會つた今度は、例の「扱」は中々出て來ないで、寧ろ當方が腰をあげる機會もがなと思つた位であつた。

話は日支事件に始まつて、英國が國際聯盟との密接な關係から、充分に日本に同情のある態度を採れなかつたことは残念だと云つて、一應の釋明があり、次で二年前の恐慌と國民内閣の成立に及ぶ。氏は云ふ、あれはほんとに一場の夢でした、吾々は今でもあれが現實だとは信じられない位ですよ。マクドーナードと云ふ人が元來自我の強い野心家であつて、労働黨の首領

でありながら、黨を振り捨てて敵黨に味方することは、やりさうな事なので、自分達は以前からさう云ふ人だと思つてゐました。恐らくあの人位孤獨な人はないでせう、亡くなつた夫人とは親しかつたやうですが、それを除いては本當に心を打明ける親友を持たないでせう。一體スコットランド人はあゝ云ふ型の人が多いので、自分達イングランドのものとはどうしてもその點がピッタリしない。曾て自分はスコットランドを旅行して大雨に會つた、路傍に仕事をしてゐた労働者に「大變な降りですね」と挨拶したら、一寸こちらを振り返つて「そんなやうですね」と云ひつゝ、知らん顔をして仕事に取掛つた。その無愛想なこと、人にものを打明けないこと、表情のないこと、それがスコットランドの特色です、マクドーナードと云ふ人も丁度それなのです。あの人も今は國民内閣の首相として街頭の人に人氣がありますが、あれは單に保守黨のロポットに過ぎないので、何れ早晚不用になつた時に追ひ出されるでせう。金兌換停止をしたくないと云ふので、國民内閣が成立したのに、やはり兌換停止をしてつた。あれでは國民内閣の所詮がないし、それに本當の偉い政治家は今日の労働黨ほどに反對黨を打ちのめしませんが、反對黨を相當強くして置かないと、政府が却て困ることがあるので、殊に今の政府



に於けるマクドナルドの地位の場合などにはさうです。然し労働黨は議員の数は減つたが投票数は六百萬以上で廿九年の時よりも二百萬減じた丈ですから大したことではない。此の次の総選挙には百五十から二百名の議員をえ、その又次には本當に絶對多數黨になるでせう。一昨年の事件から絶對多數黨でない政府を作ることには懲々したから、今度第三次労働黨内閣の出来る時は絶對多數黨となつた時で、それは次の次の選挙です、先づ一九四〇年以前にはありえないでせう。

氏はフェビアン協會のセクレタリーであり、マクドナルドと對立した地位に在る。だから氏のマクドナルドに就ての批評と労働黨の未來に就ての樂觀は、多少割引して考へる必要がある、然しそれにしてもマクドナルドが、いかに一部の人々から考へられてゐるかの一斑を語るものとみてよからう。

## (五)

フェビアン協會から戻つてある日本人の來訪を受け、一緒に食事しながら英國での仕事に就

て聴く。別れて一人で街を歩いてゐたら、一人の婦人が後から追ひかけて来て、話しかけても宜しいか、あなたは昨日大英博物館と國民展覽會とに往きはしなかつたか、私はそこであなたに會つたやうに思ふと云ふ。否自分は今朝英國へ着いたので、そんな所へはまだ往かないと來たら、あなたとよく似た日本人に會ひました、それで間違へたのでせうといふ。之が獨逸の街でならすぐに「街頭の婦人」と氣が付く所だけれども、英國であつたのと今朝着いたばかりなので、何か用事かとまだ納得が付かなかつた。所でやがて自分の室は非常に氣持よく、きつとあなたを満足させることが出来るでせう、酒はないが珈琲はあるし、若し氣に入つたら明朝までゆつくりしては如何といふ、こゝで始めて婦人の本性が分つたので、一體あなたは何を欲するのですと尋ねたら笑ひ出して、分つてゐるでせう、日本人を待つレストランが倫敦にも二三ありますが、私はそこへ往くのが嫌なのです、私は孤獨で寂しいあなたもきつと寂しいでせうと云ふ。餘計なことを云ふと思ひながら、残念だが金の持合せがないから、別の紳士を探したらいゝでせう、さよならと云ひつゝ別れた。倫敦にも昔からかうした婦人が多かつたのであらう、然し私は倫敦では之が始めてであつた。後で日本人に話したら大英博物館と國民展覽會は



きまつた手ですよと云つてゐた。

以上はすべて倫敦に着いた一日の出来事である。翌朝私は早くケムブリッジへ立つてそこで勉強してゐる日本の友人S氏を訪うた。外國で日本人とばかり話してゐるのをみると、由なきことをするものかと思ふ。然し始めて外國へ往つた時か一應外國生活をした後で、自分の所感を聽いて貰ふと云ふ時には、日本の友人に會ふことは大變有益である。S氏は數年前に東京帝大の文學部を出て倫理學研究の爲に英國に往きケムブリッジに落付いて主として實在論を中心に勉強してゐられる。氏と話し食ひ歩き丸一日を暮した。その話で英國哲學界の近狀、ケムブリッジ大學に於ける哲學倫理學の現狀を聽いて、私のえた所は尠くはなかつた。

## (六)

グリーン、ケヤード等の理想主義がオックスフォードから始まつたのと反對に、實在論はケムブリッジから起つて、今は理想主義に代つて英國哲學界を支配してゐる。ニエートン以來ケムブリッジは自然科学の研究を誇りとしてゐる。オックスフォードの誇りが古典の研究であるの

と兩々相對峙してゐるのである。理想主義が現實から遠ざかつて觀念に走り過ぎるのに對して、自然科学に重きを置くケムブリッジから生れた哲學が實在論に傾くのは當然である。十九世紀の後半にオックスフォードのグリーンに對して、ケムブリッジにはヘンリー・シヂウィックがゐた、然し當時は理想主義に壓倒されてシヂウィックは比較的不遇に終つたが、彼れの蒔いた種は今實つて、ホイットヘッド、ラッセル、ムーア、ブロード等の鱗々たる實在論者を出し、オックスフォードさへもがその影響を受けつゝあるのである。

S氏によれば自然科学そのものが吾々が學んで來たのとは、最近非常に違つて來た。物理學、生物學、心理學が異常の進歩を遂げたのである。そしてその影響はひしひしとケムブリッジの哲學の中に浸透しつゝあるのである。實在論はまだ本體論や認識論や倫理學に對して一定の立場を明かにしただけで、社會哲學や社會思想にまでには手が伸びてはゐない。何れ早晚その時が來るだらう、興味あることは、實在論は理想主義に對抗すると共に、マルキシズムの哲學にも對抗することで、一般に英國の哲學者はマルキシズムなど相手にしないけれども、假りに實在論者の説とマルキシズムとを並べてみると、マルキシズムはケブリッジの哲學者からみて一



世紀も時代に遅れた自然科学を基礎としてゐるのであり、あの認識論の如きは問題にならない陳腐なものだと云ふことになる。

昔ケムブリッジで話したことのあるソーレー教授の噂や、新進の逸才ブロード教授や、死んだマックタガートの傳記を書いたローウェス・ディキンソンのことなど氏と四方山の話をして、夜遅く氏に別れて倫敦に戻つた。外國にゐる日本人に會つてすぐ分るのは、よく努力してゐるかブラブラして怠けてゐるか云ふことである。緊張した努力を續けて日増しに伸びつゝある友人に外國で會ふことは、本當に嬉しいことの一つである。外國人と外國語で話すのでは充分にえられないものを、此の日はS氏との會談によつて收めることが出来た。

## (七)

翌日はバーミングハムのウッドブルック・カレッジに往つた。此の學校に就て、曾て私は「改造」誌上に書いたことがある(拙著「在歐通信」の中に收む)。その後時々日本の人が學校を訪問するさうである。私共夫妻は此の學校にかなり永く關係を持ち、前回の英國生活には大切な役割

を演じて呉れた學校である。今度は僅に二三時間しか居れなかつた。唯日本からの土産物を昔世話になつた人々に贈ること、その教頭ウッド氏に會つてその後の英國に就て聴きたい爲であつた。氏とは外の二三の人と一緒にストープを圍んで三十分話することが出来た。

學校はチヨコレート製造で有名なカドベリー氏の寄附で成立し、氏が自由黨員である爲か、教師も亦自由黨又は労働黨に屬する人が多い。今私と話してゐるウッド氏は自由黨員である。氏はしきりに獨逸のヒットラー運動と日本の外交に就て聞きたがつた。次で英國の事情に話が及ぶと、氏はマクドナルドに對して同情のある見方をしてゐた、あの非常の時にあゝするより外なかつたらうといふのである。目下英國に於ける最大の問題は失業者である、何しろ三百万内外の労働者が失業し、その家族を併せると、七八百萬に及ぶだらう、之をどうするかで學者も政治家も頭を悩ましてゐる。そして遂に立派な解決策を見出しえない。大敗後の労働黨は幾分左傾するだらうが、元來英國民に離すべからざる特徴は立憲的コンスティテューショナルと云ふことだから、暴力革命の方向に往くとは見へないし、労働黨内に所謂プロレタリアと共に重きをなしてゐるのは所謂洋服細民サフコイト・フレイムで之は革命主義にはどうしても賛成しないから、どうなつても労働黨が共



産主義に走るとは考へられない。十八世紀末の産業革命が蒸汽力により、十九世紀末には電氣による第二の産業革命があつたが、最近第三の産業革命が進行しつゝある。新機械の發明作業方法の改善等（産業合理化を意味するのであらう）之は確に新産業革命である、そしてそこに失業の大原因があると思はないかといはれる。私はそれは失業の一因にはならうが、やはり主要な原因は資本主義の組織そのものに在ると思ふと答へたが、氏の云ふやうに最近の産業合理化が、第三の産業革命とも云ふべき大きな意義を持つことは疑へない事實である。

氏と外を歩きながら話してゐた時に、昨年亞米利加のシカゴのある講演會で日本のトヨヒコ・カガワ（賀川豊彦氏）と教壇で一緒になつたが、賀川氏の日本に於ける地位はどういふものと尋ねられた。一般に英米國民殊にキリスト教に關係する人々の間に於ける賀川氏の名聲は素晴らしいものである。之は日本のミッシェンの宣傳が與かつてゐるやうだが、氏を以て日本の思想界の代表者と考へてゐる。一體に外國で評判な人の日本に於ける地位を思ふと、中々面白いものである。日本で名聲のある人が外國で評價されず、外國で評判されたり好かれたりする人が日本で案外な人がある。勿論外國語の能力にもよるが、彼我國民性の差から來る人物

評價の差が現はれて面白い。外國で名聲の高い人を持つことは、日本としては感謝してよいことである。それを直に貶す日本人の多いのは、心なき業だと思ふ。

## (八)

その翌日は一日家に引き籠ることにした。少し疲れたのと、集めた新聞雑誌や新刊書に一應眼を通したかつたからである。すると豫て出して置いた手紙の返事が各方面から届いて、幸なことには重複は一つもなく、之から以後毎日御茶か食事に招待される日程がすっかり整つた。先づ之で無駄なしに英國生活が出来るなど、心嬉しく思つたものである。

哲學界元老ミヤヘッド (J. H. Muirhead) 氏からの中餐の招待を受けたのが最初である。氏はグリーンンの門弟として、現代に於ける理想主義の最後の人である。年はもう七十二とか云ふ、氏とは以前カヴェントリーの邸を訪ねて一泊させて貰つた關係である。然し果して私を覚えてゐるかどうかと手紙に書いた所が、返事にはカヴェントリーで泊つたことと奥さんから美しい日本の着物を貰つたことで、永久に忘れられないと云つて來られた。倫敦から一時間廿分程離



れた南サセックスに住んでゐられる。ステーションに着いたら氏が迎へに来て呉れた、そして七十餘の老哲學者は壯者を凌ぐ矍鑠さで私のカバンを持たうとさへ云はれる。歩いて十分餘氏のこじんまりした邸に着き、三四年前に再婚された夫人に御目にかゝつた。氏の前夫人は亡くなつた倫敦大學の政治學の教授グラハム・ワラスの妹であつた。前回カヴェントリーで泊めて貰つた時にはその亡夫人の思出にしんみりしたのであつたが、今新しい夫人を見出して氏は更に元氣になられたやうであつた。

中食を済ませてからストーブの前で珈琲を飲みながら、私の携へて來た著書「グリーン思想體系」を氏に見せた。前回の時氏はグリーン、ケヤードの理想主義運動は實に華々しい思想運動であつた、然しまだ誰もあの運動の歴史を書いたものがない。君がそれを書いてみないかと云はれた。私は氏から色々の材料になるやうな話を聽いて大變爲になつた、運動の渦中に在つた氏は、書物で求められない資料を與へて呉れたのである。日本に歸つてから數年の後私は漸くグリーンを中心とした理想主義運動に就て纏めることが出來た。グリーン未亡人が生きて居られたなら、先づ差上ぐべきものであつた、然し夫人は既に一九二九年の九月に亡くな

られたし、次にはオックスフォードのベリオル・カレッヂの圖書館に寄贈しようかと思つたが、ミアヘッド氏に見せてゐる間に氏が欲しさうであつたので氏に贈ることにしてつた。氏自身も亦最近の「哲人としてのコールリッチ」と「アングロサクソン哲學に於けるプラトリーの傳説」の兩書に於て、理想主義運動史の一端を纏められた譯である。

理想主義の老将から實在論に就ての感想を聽きたいのが、私の氏を訪ねた目的であつた。それに話を向けると、氏は實在論はまだ批評的破壊的たるに止まつて、少しも積極的建設的な仕事をしてゐないと云はれた。その途中に夫人が口を挿まれて、夫はもう年老いましたから餘り難しい話で苦しめないで下さいと笑はれたので、それ以上に話を続けることが出來なくなつて了つた。やがて氏は食後一時間晝寝するのが習慣になつてゐるから、濟まないが待つてゐて呉れないかと云ふのであつた。曾て南獨逸の山莊に老哲學者フッサールを訪ねた時も、そんなことを云はれた。歐米人の規則正しい生活、人によつて亂されずに自己の生活を貫くことは、日本人の學ばねばならない點である。

起きられた氏は私を導いて附近を案内された。此の邊はウイリアム征服王が大陸から上陸し



た所で、當時の古戰場が澤山に在る。路々氏は日本の帝國大學の哲學の教授に就て聞かれたので、桑木嚴翼博士や西田幾多郎博士などの話をし、氏は又ボナー博士——あの「哲學と經濟學」マルサスとその作物「マルサス人口論」等の著書で有名な——は君をよく覚えてゐるから訪ねてあげ給へなど云はれ、邸に戻つてからステーションまで氏に送られ、夕方の列車で倫敦へ立つた。プラットフォームに立たれた氏は「無事で、奥さんに宜しく」と懇に云はれ、段々その姿の小さくなる氏を見送りながら、今度來て七十二の老翁に又再び會へるだらうかと、自分は哀愁の念に打たれずにはゐられなかつた。

## (九)

マクマレー (J. MacMurray) 教授の宅に招かれたのは、その翌日の午後であつた。倫敦も北の郊外とも云ふべきベルサイズ・パークで地下鐵道から下りた自分は、十年前に住んでゐた地方だけに懐しさが一入深かつた。氏のアパートのベルを押したら出て來られたのは、會てオックスフォードで會つたことのある夫人であつた。氏の社會的地位の上つたのと一緒に、夫人も

亦若々しくて上品になられた、後に書くトナー氏の夫人と云ひ、氏の夫人と云ひ外國の夫人が年と共に若さを失はず、益々成長してゆくのを見るにつけ、日本の中年の夫人をみて情なく思ふことが多い。

ストーブの前で氏と話した二時間餘は、倫敦で一番愉快でそして收穫の多いものであつた。話題は多岐に亘つたが、氏は云ふ、哲學は過去常に自然科學の發達に伴つて刺戟を受けて來た、十七八世紀の物理學、十九世紀の化學と生物學、そして最近では心理學の發達から非常な影響を受けてゐる。従つて哲學を研究するものは、當時の自然科學を看過してはならない。それと近頃感ぜられるのは、マルクス、レーニンの唯物史觀の中に酌むべきものが澤山あると云ふことである。イデオロギーは當時の生産關係に規定されると云ふあの命題は、眞實に合してゐる。英國の哲學者にはマルキシズムの研究をするものが尠いが、あれは之からの哲學者の忽せにしてならないものである。一般にマルキシズムは最近英國には注意を惹かれるやうになつたが、學界殊に講壇に於ける影響はまだ僅かなものだが、マクマレー氏は恐らく例外の一人だらう、氏は労働黨員であり、ユニバーシティ・カレッジの社會主義協會の會長をしてゐられるのであ



る。

氏のマクドナルドに對する批評は峻嚴であつた。彼やスノーデンは労働黨員と云ふよりも寧ろグラッドストーン時代に育てられた自由黨員と云つた方が適當で、彼等の社會主義は科學的と云ふよりも多分にセンチメンタルの色彩を持つてゐた。一九三一年の事件は、英國の労働界に澤山の教訓を與へたが、その最大なもの、もうセンチメンタルな社會主義は駄目だと云ふことである。彼等が労働黨から分離したことは、労働黨が自由主義的な又感傷的な社會主義を清算したと云ふことである。勿論短い時間を採れば、彼等を失つたことの打撃は大きい、今までの労働黨が過つてゐたのである、之から労働黨は心機一轉更生の路に進まねばならない。それには實によい機會である。労働黨の未來は多難ではあるが、新しい人生の門出に立つ若人のやうな希望がある。永い悪夢をみてゐたと思へば間違ひはない。

話が最近出版の良書に及んだ時に、氏は殆ど見當らないが、マッキーバーの「近代國家」だけは注目に値すると云はれた。大英國の没落と云ふことがよく云はれるがどうかと聞いたら、相對的には確に没落しつゝある。英國が十九世紀に持つたやうな獨占的地位は失つて了つた。

然し此の國は天與の物資に恵まれてゐる、従つてまだ五十年は世界の強國としての地位を維持してゆけようが、それから後は落伍するとみる外はあるまいと云ふことであつた。その昔オックスフォードで氏を個人教師に頼んだ時、プラト、アリストートル、ルッソー、カント、ヘーゲル、グリーン、ボサンケ等に就て教へられ、哲學者であつて博識な氏に感心したが、今日視野の益々擴められ、間に應じて直に答の出る敏速さには、又更に自分は敬服したのであつた。

(十)

トーネー (R. H. Tawney) は労働黨に屬する社會主義思想家で、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの經濟學の教授である。同僚のハロルド・ラスキー (H. I. Laski) の俊敏に對していかにも寛厚の長者として、労働界にも敬愛されてゐる人である。少し前にフェビアソンの協会の講演會でコーリン・クラークの話をききに往つた時、司會者をしてゐたトーネーに會つたら、手紙を出したらその日の御茶に必ず來て呉れと云ふことであつた。約束の日に往くと、



夫人は病氣で大きな客間の中央にベッドを置いて、その上に坐つてゐられる。坐にウェールス大學の國際問題の教授ウエブスター夫妻とロンドン・スクールの經濟史のミス・パワーがゐた、主人夫妻も御客も何れも日本支那には幾度も來た人達で、プロフェッサー・ナス（那須皓教授）やプロフェッサー・タカギ（高木八尺教授）をよく知り、鶴見祐輔氏が労働黨の會合で講演したことが話に出る。夫人のベッドの上に黒い猫がある。トリーネーがそれに紐を投げてはじやらしてゐる、御客を呼んで獨りで戯れてゐる所に、呑氣なトリーネーの面目躍如としてゐる。

滿洲事變に就て話が始まる。物の分つた外國人の中へ入つたら、先づ日本の政策を忌憚なく批判し、次で日本の立場を説明するに限る。之を逆にすると宜しくない。相手が分つた人ならば、いや英國だつて悪いのだ、他國の事を云へた義理ではない、誰が最初の石を投ずる資格があるのだと考へるにきまつてゐる。こゝの人々は何れも支那に就ては悲觀論者で、ウエブスター教授の如きは支那は近代國家を爲してゐない、結局國際管理でもするより外あるまいと云ひ、トリーネーはそれほどではないが、支那は近代文化の遅れた國で、あれを建て直すには、本當の國家的統一の模範をどこかの州が示すに限る、それと教育がすつと普及せねばならないと云ふ

のである。

此の席でもマクドナルドの評判は頗るよくない。佛蘭西の社會主義者が社會黨を踏臺として、立身出世したと同一の往方をしたのがマクドナルドとスノーデンだと云ふ。唯マクドナルドは國際舞臺に於ては折衝は實に巧妙だから、あれを外國への大使にするが一番よいとウエブスターが云へば、トリーネーはそれにはもう餘りに現存の地位が高くなり過ぎた、何かの特別使命の大使なら宜しからうと云つてゐた。未來の労働黨の首領に就ては、ランズベリーもヘンダソンももう老いてゐるし、サー・スタッフォード・クリップスかシンウエル等が有望だらうと云ふことであつた。之だけの話だと今日は餘り收穫はないかなと思つてゐたら、御客様が歸つてから書齋へ往つてゆつくり話さうと云つて誘つて呉れた。そこでトリーネーは棚から一々本を取り出しては、最近八九年間私の英國を去つてから後に出た良書を説明した呉れた、之に就ては今詳しく述べるには當らないが、之は私には大變有益であつた。何でも用事があつたら、日本から手紙を送つて呉れと云ふ別れの言を聞いて外へ出たら、まんまるい月が向ふの空に浮んでゐた。



(土)

獨立労働協会の會長フェンナー・ブロックウエイ (F. Brockway) は會アクリップフォード・アレンを助けて同會のセクレタリーを努めてゐた。協会の夏期大學でも會つたし、個人的にも色話したことがある。マクドナルド先づ協會から去り、アレンも亦脱退し、協會自體が労働黨から分離して、労働黨と共產黨との中間に位して、名實獨立労働黨となつて六名の代議士を下院に送つてゐる。労働黨建設の殊勳は獨立労働協會が負はねばならないので、自由黨から獨立した労働黨を作るが爲に、獨立労働協會は生れたのである。爾來フェビアン協會と並んで労働黨内の社會主義團體であつたが、今や多年因縁深かりし労働黨から離れて了つた、之が私の英國に見出した變化したことの一つであつた。

ブロックウエイは云ふ、労働黨の現状に慥たらないで遂に脱退した。本來から云へばラスキもコールも吾々と行を共にせねばならないのだが、彼等は労働黨に留まつて内部から改造しようとしてゐる。遺憾なのはアレンで形影相伴ふが如くに自分と一緒に歩んで來たのに、到頭

分れて了つた、彼は男爵を授けられて今上院に列してゐる。三十一年の恐慌以來吾々の同志關係にも亦恐慌が襲つたのである。協會員の労働者の過半は今失業状態に在るので、會費が納まらないで困つてゐる、自分も無給で働いてゐるので、晝は事務を執り夜は人々に面會し、十一時以後夜半に至るまで原稿を書いてそれで生活してゐるさうである。氣のせいかどこか憔悴して元氣がない。

話はマクドナルドに始まる。私は云ふ、大戰當時非戰論を唱へて第二インターナショナルの精神に忠實であつたのは、マクドナルドやスノーデンではなかつたか。それに引きかへ逸早く戰爭に参加して内閣に列したのはヘンダーソンではないか、労働黨分裂當時をみると之が逆になつてゐる。非戰論者としてのマクドナルドのことを考へると、今度の彼れの行動が理解が出来ないし、同時にヘンダーソン等の労働黨が社會主義に一貫したのは、偶々問題が失業手當と云ふ労働者階級の當面の問題であつたと云ふ偶然から來てゐるのではなからうかと。ブロックウエイの云ふには、それは尤な考へ方だが、マクドナルドが段々と保守的になつたと反對に、ヘンダーソンは大戰當時はまだ政治界に新しいだけ眼界が狭かつた、然し彼はマク



ドーナルドよりも元來伸縮性に富んだ人で、<sup>ラッシュニードツァイル</sup>卒 伍の労働者といつても接觸してゐたので潑刺とした若々しさを失はなかつた。のみならず二回の労働黨内閣に列して、その視野は益々擴がり、今では歐洲國際場裡ではマクドナルドに劣らぬ外交家として通つてゐる。要するにマクドナルドは退歩したが、ヘンダーソンは常に進歩して來た、此の差異を看過してはならないと。

獨立労働協會と共產黨とがメモリアル・ホールで討論したことは有名だが、結局差別はどこに在るのかと云ふ問に對して、彼は答へるのに、マルクス、レーニンの文獻は之から英國の労働界に研究されるだらう。自分等は唯物史觀にも労働價值説にも反對はないが、社會主義實現の戰術に於てどうしても共產黨と一致しえない。第一には各國事情を異にするのに、モスコイの命令により一律に指揮されることは吾々英國人に到底堪へられない。第二に共產黨は結局暴力手段に訴へようと云ふのだが、英國の如き國では之は成功しない。合法手段の方がよいと云ふこと。第三に共產黨の道德觀念は英國人には到底一致しえない。たとへ從來の道德觀念にブルジョア的のものがあるとしても、共產黨のやうに不必要な程度まで既存の道德觀念に違背

することは、輿論の勢力ある英國では反抗を招くのみでうる所がない。第四の點は遂に聞き漏らした。第三の點は結局唯物史觀に同意しえないことになるのだと思ふが、それは追窮しなかつた。要するにブロックウエーの話は英國に於けるマルキシズムの地位を窺ふに、好個の資料になると思ふ。

## (三)

倫敦の生活は忙しかつた。毎日人に會ふ外に芝居と活動とヴァリエテとに通ふ。慾を云へば始め十日倫敦にゐて人と話し、後二週間ブライトンかボーンマウスのやうな海岸に引き籠つて靜にえた刺戟を味ひ、雑誌と書物とに眼を通して、今一度倫敦に出て人と話しが出來ると一番良いのであるが、残念ながら今度の旅行は餘す所僅に三四日しかないのである。それでも靜かな二三日はどうも持たねばならないが、その場所はオックスフォードを措いて外にはない、兼ねて同地には舊知のブライス氏が居られる、之にも是非會はなくてはならない、それを併せて二三日ホテルの一室に人を避けた生活を送らうと定めた。



ブライス (H. H. Price) 氏は曾てモードレン・カレッヂのフェローをしてゐて、私の今一人の個人教師であつた。クレメント・ウエップ教授に誰か若い哲學者で話相手になつて呉れる人をと求めたら、まだ若い二十七八のブライス氏を紹介して呉れたのであつた。當時から謙遜で上品ないかにも人好きのする若い學徒であつた。八年立つた今ケムブリッヂのS氏に聞くと、同氏がムーア教授に未來の英國哲學を背負ふ人は誰かと訊ねたら、言下にそれはオックスフォードのエッチ・エッチ・ブライス氏だと云はれたさうである。それを聞いた時に私は嬉しかつた。そのブライス氏の中食に招かれたので、前夜倫敦からオックスフォードに往き、ホテル・ランドルフルに室をとり、翌朝十時氏をトリニチー・カレッヂに訪うたのである。

會つた瞬間八年の時は若い氏をさへ流石に老けさせたなと思つたが、話してゐる内に昔そのままの氏が現はれて來た。一別以來の物語りをしてゐる内に、時間が來たので講義に往くと云ふので、一緒に伴はれてミルの「論理學體系」に關する講義を聴いた。若いには似合はず堂々たる講義振りだと思つたが、内容は殆ど分らなかつた。その次の時間は「自由に關するカントの學說」と云ふ講義だが、之は失敬して書店ブラックウエルで書物を見て廻り、一時に再び氏の許

に寄つて食卓に坐り、そこで經濟學をやるホールと云ふ人に紹介された。

食後約三時間五時までストーブの焰を見つめながら、色々の話を引き出した。理想主義に對する批判と實在論の現状とこそ、私が氏から聴かうと兼ねてから楽しみにしてゐたのである。

氏はオックスフォードで育つてケムブリッヂで自然科學を勉強し、次でムーアやブロードに指導された人で、正にオックスフォードとケムブリッヂとの長所を併せた新進の哲學者なのである。近著「知覺論」(Perception 1933) は學界に名聲を揚げた氏の處女作である。此の時に氏が話されたことは、色々の材料を読みこなしてから後、それだけを題目として他日一文を草してみよう。唯氏が云はれた一句、カントは問<sup>クエスチヨ</sup>を出すには剴切であつたが、答<sup>アンサー</sup>を與へるに必ずしも妥當でなかつたと云ふ一句は、いつまでも私の頭に残つて離れなかつた。

氏と別れてから一日二夜をホテルの一室に暮した。倫敦でもオックスフォードでも會ひたい人はまだ多かつた。リンゼーにもラスキーにもコールにも、ボナーにも遂に會ふべき暇を持たない。ブレイルスフォードは亞米利加への旅行中で、汽船の中から手紙を呉れた。限りあるを以て無窮を追つてはいけない、唯靜な一日だけを此のオックスフォードで持てばもう満足し



て英國を立たねばならない。自分は態と女中を呼んでストーブに石炭を入れさせ、赤や青の焰をみつめながら考へに耽つた。英國社會運動の最近の傾向と實在論の業績と、此の二つを知ることが私の渡英の目的であつた。それは果して満足されたか。たとへ充分ではないにしても、此の短い時間に多くの人から尊い示唆——それはそれだけで充分ではなく、やがて補充されることにより豊かな實りとなる示唆を與へられた。古い知人は有難いと泌々と感謝された。

少しく考へを擴げてみると、自分の今持つ興味は、英國よりも獨逸と露西亞とに在る、之が私の未來の研究の對象である、だが何と云ふ永い間自分は此の國に興味を持つて來たことであらう、そして此の國の此の土地の此のホテルの前のベリオル・カレッジのグリーン、ケヤードによつて、私の眼は開かれて私の思想は作られたのだ。思へば此の土地は自分の育ての故郷である。だがすべてのものは、生きんが爲に死なねばならない。自分の理想主義も亦それが生きんが爲には、殻を破つて屍を越えねばならない、そしてそれこそ正に理想主義の殘した教訓であつた。日は暮れて途は遠い、然し吾々は進まねばならない。かう思ふと何ものか神聖なもの前に跪くやうな敬虔な心が動いて止まなかつた。

オックスフォードから倫敦に戻り、間もなく自分はヴィクトリア・ステーションを立つて、大陸へと向つた、佛蘭西、瑞西を経て、ファッシスト治下の伊太利を廻つて、ナポリから日本への歸航の船に乗る爲に。

昭和八年八月號「經濟往來」



昭和九年九月三日印刷  
昭和九年九月七日發行

歐洲最近の動向與付  
定價貳圓五拾錢

著者

東京市品川區大井庚塚町四九四八  
河合榮治郎

發行者

東京市京橋區京橋三ノ四  
鈴木利貞

印刷者

東京市神田區錦町三ノ二五  
前田宗松

印刷所

東京市神田區錦町三ノ二五  
文成社

發行所

東京市京橋區京橋三ノ四  
株式會社  
日本評論社

電話京橋六一九一四  
振替東京一六六





河合榮治郎著作目録

書名	発行年	定価	發行所
一、労働問題研究(絶版)	大正九年	五・〇〇	岩波書店
二、社会思想史研究(第一卷)	大正十三年	三・〇〇	岩波書店
三、在歐通信	大正十五年	二・〇〇	改造社
四、英国労働黨のイデオロギ―	昭和四年	〇・五〇	千倉書房
五、トーマス・ヒルの思想體系(上)	昭和五年	四・〇〇	日本評論社
六、トーマス・ヒルの思想體系(下)	昭和五年	五・〇〇	日本評論社
七、社会政策原理	昭和六年	一・〇〇	日本評論社
八、大學生生活の反省	昭和六年	一・八〇	日本評論社
九、書齋の窓から	昭和七年	一・二〇	日本評論社
十、學生思想問題 <small>(織山教授との共著)</small>	昭和七年	〇・四〇	岩波書店
十一、歐洲最近の動向	昭和九年	二・五〇	日本評論社



國立國史館  
94

國立國史館



